

団員レポート

副団長：中澤 謙

うつくしま広域スポーツセンター企画運営委員長
会津大学文化研究センター準教授

はじめに

今回、副団長という立場で本研修に参加させていただくことになった。団長にもしもの不慮の事態が起きた場合の代役という比較的フリーな立場ということもあり、挨拶の準備と覚悟だけはしつつも、肩の力を抜いて研修会に臨むことにした。

今回の研修会の大きなテーマとして、公共の福祉に資するクラブが「どのようにして」成り立っているのかを、研修を通してその構造を明らかにすることを掲げていたが、一つ一つの講義・視察の際に団員の方々が質問される内容のほとんどが、自らの実践に基づいた「どのようにして」に関する内容であることに気づき、その意欲に感服するとともに、個人的なテーマとして漠然と掲げていた「堅牢性」に焦点を絞ることにした。

焦点を絞った背景には、「うつくしまスポーツキッズ発掘事業」に5年間、「総合型地域スポーツクラブ実践評価委員会」に3年間、その後3年間、うつくしま広域スポーツセンター企画運営委員会の委員長を努めてきた経緯で感じていたことがある。いずれの立場においても、時間をかけてコンセンサスを得るという方法ではなく、全体の方向性を見極めた上で、時間をかけて関係者間の妥協点を探し、新しい知見を協力して見いだしていくという方法をとってきた。背景にあったのは既存の組織の「堅牢性」である。

ネットワークに内包されるもの

研修会全体を通してライン・ノイス郡スポーツ相談課のアクセルベッカー氏に大変お世話になった。行く先々における彼の対応からは、それぞれのクラブや関係者と定期的にコミュニケーションをとり、専門的な知識とスキルを熟達させてきた様子が伺えた。

私自身、「幼児期のシステムティックなスキルトレーニング」については違和感を感じたので(現



場を見た訳ではなかったので氏の説明に対して)、移動のバスの中や食事中に、「自発的な活動としての遊び」の担保と「環境を通しての教育」についての共通理解があるのか、ズケズケと不躰な質問を幾つかしてしまった。最初は困惑したような回答をいただき、なんとなく気まずさが残っていた。しかしながら翌日の食事後、落ち着いた時間を見計らって「内容については単なるシステムティックなトレーニングではない。実際に見れば分かる。しかしながらあなたの言われた事については考慮すべき事柄かもしれない。」という配慮に充ちたベッカー氏から言葉をかけてもらった。氏の細やかな心配りに感動を覚えた。

また、通訳を務めてくださった多田さんの洗練された翻訳能力の高さにも感服した。彼が持つ語彙そのものの数も然ることながら、双方が意図する話しの内容を汲み取り、ドイツにおけるクラブの構造と背景にある哲学と照らし合わせながら言葉を選んで伝える高い力に随分と救われ、裏方として支えていただいた。移動の道すがら、多田さんの専攻について少しお聞きすると、ヘーゲルについて学んでいるということであった。研究室の隣にいる社会学の先生がヘーゲル哲学を紐解くアプローチで公共の福祉について論文を書いていたのを思い出し、ドイツから戻ってすぐにヘーゲル哲学について聞いてみた。実のところ良く分からなかったというのが本音であるが、「多様な関係が一個の個体の内に物象化される」という言葉と

「関係性が人を統合し、社会を統合するんです。言葉や歴史は社会なんですよ。」という言葉が印象に残った。

アクセルベッカー氏の相手に合わせて言葉を選びながら伝える姿勢の裏側にあるものと、多田さんの翻訳に対する姿勢の裏側にあるものとして感じ取った共通性は、ドイツ最大の哲学者であり、公共の福祉について言及したヘーゲルの思想なのかもしれない。人間社会の多様性が担保されている限り、クラブの独自性と社会そのものが持つ多様性は二律背反する部分を含みつつ絶えず存在していく。他者が持つ哲学の良さを包み込むような変容を成し遂げていくには、この役割を果たすポジションの専門化と、そこに専従的に携わる人の熟達化が急務であると感じた。地域のクラブのネットワークを行き来するために必要な資質として、それぞれの関係性をもつ複雑性や両極性、柔軟性を内包する哲学を個人内、そして関係する団体内でダイナミックに発達させていく必要があると思うに至った。

文化としてのスポーツの社会的役割

福島県のスポーツ振興審議会でも課題に上がった、障がい者のスポーツ環境について手がかりを得るべく、障がい者スポーツの窓口はどうなっているのかについてベッカー氏に単刀直入に問いを投げかけた。返ってきた答えはシンプルで、分け隔てなく全て「スポーツ課」という一つの窓口で受けているということであった。ただし、障害にも種類があり、心と身を同じように扱われたくないという問題もあるので、細かな配慮に基づいた対応が必要とされるとのことであった。また、クラブの形態や機能は様々であって、障がい者のみのクラブもあり、クラブによっては一緒に行うスポーツも準備しているとのことであった。

訪れた高齢者クラブでは、青少年と一緒にやって行うプログラムはあるのかという質問に対して、笑顔で「そんなことをしたらお互いに疲れるでしょう。」という明快な答えが返ってきた。日本における多種目多世代、いつでもどこでも誰でも、というフレーズが、多種目多世代がいつでもどこでも誰でもできるクラブでなければならない

というような、スタティックな解釈を未だにされる事も多いが、実際にはそれぞれのライフステージに必要な関係性を作り上げることに焦点が絞られていた。「疾病予防のため」「健康増進のため」といった直接的な目標を掲げて社会的構造を構築していきつつも、目標を通して人間全体、社会全体を繋いでいく機能をクラブが担っていると感じた。目標は「疾病予防」「健康増進」であっても、目的は地域づくりであるのだろう。

クラブにおけるスポーツは文化であって、生まれた時から文化とかかわることで、その社会を支える基本的な考え方、行動様式、規則、規範などが、受け継がれることで存続していく。逆に、規則や規範などが受け継がれなければ、その社会は共同の基盤を失い、崩壊していくことになる。関係性を保つ仕組みが存在しなければならぬ一方、クラブ外の関係性や多様化にも対応していかなければならない。人間の本源的な欲求である好奇心から発生する遊びを基盤とし、生涯にわたりそれを担保している「スポーツ文化」を生活の一部に取り込み継承していることは、ドイツ社会における生涯にわたる哲学の醸成に一役買っているのではなかろうか。

リットナー教授を招いての晩餐会の中で、水泳のクラブ関係者とお話をさせていただいた際に、憧れの東西統合ドイツ競泳チームの主将、「アホウドリ」ミヒャエル・グロス氏の現在について聞いてみた。「彼は現在、弁護士だ。」思慮深い眼差しとともに返ってきた短い言葉の中に、柔軟なる堅牢性を見出した。

最後に

研修を通して、海に面さない地理的な条件や、長い戦争の歴史を持つ地続きのヨーロッパの国々の中で堅牢なドイツ経済が保たれている背景を垣間みた気がした。

最後になりますが、このような得難い機会を与えて下さった関係諸氏、共に研鑽にあたった研修団の皆様方との出逢いに心より感謝申し上げます。本報告の終わりの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

団員：鈴木 ゆかり

よりづか☆ちよいスポ倶楽部 統括クラブマネジャー

はじめに

私が総合型地域スポーツクラブに係る事になったのは今から5年前。当時の事務局長。（現在、北海道体育協会 総合型地域スポーツクラブ育成アドバイザーであり、我がクラブの副理事長でもある）久保田氏に、「クラブを作りたいんだけど、手伝ってまない？いろいろな所に行けるよ！旅行好きでしょ？」と、声をかけられた事がきっかけでした。確かに現在、道内、道外と飛びまわっている自分がいます。はじめのころは、総合型地域スポーツクラブって…なんだろう。でも、研修会や他のクラブの視察など情報を得ることによって、どんどんはまっていく自分がいました。資格も取得していきたいと思い、まず公認アシスタントマネジャーを3年前に取得。更に上の公認クラブマネジャーの資格を取りたいと思い昨年講習会に参加。今年公認クラブマネジャーの認定を受けました。昨年まで統括クラブマネジャーをしていた久保田氏は、道体協のクラブ育成アドバイザーという立場で出向し、今年度からは私が後を引き継ぎ現在、統括クラブマネジャーとしての役割を果たしています。

海外研修参加の動機

ドイツ研修に関しては、スタートした時から興味がありました。もちろん旅行が好きだから、というのもありました。前回、久保田氏がドイツ研修のメンバーに選ばれていたのですが、仕事の都合がつかないという理由からやむなく断念。「それなら代わりに私が行ってドイツのスポーツクラブを見てきたい！」という思いが湧き、気がつけば申込書兼経歴書を提出していました。

私のドイツ派遣が決まりました。北海道からは一人でした。そういえば公認クラブマネジャー養成講習会の時も北海道から私一人の参加だった



ことを思い出しました（北海道はいつも少ない）。事前研修会では、北海道から沖縄まで16人のメンバーが集結。みんな実績も経験もある方ばかりで、その仲間入りをしている自分にもびっくりしていました。みんな同じ思いを持ってクラブに携わり、活躍している。初対面でも自然に打ち解け会話がはずむというところが、総合型にかかわっている仲間同士ならではのです。ドイツばかりではなく、日本各地の他のクラブの様子が知りたい、聞いてみたい、交流もしたいという理由もあったからでした。

初めてのドイツは…

最初に足を踏み入れたミュンヘン空港。乗換のため空港内を歩くと、あちこちに飾ってあるベンツの車や不思議なオブジェ。見るものすべてが驚きでした。あたりまえですが、デュッセルドルフの街並みはヨーロッパらしくカントリー調の建築物。走っている車はベンツ、BMW、アウディーばかり。それはあたりまえか…とっていました。がひとつ驚いたのは、信号のない横断歩道。日本では渡ろうとしても止まってくれる車は少ないですが、ドイツでは、必ずゆっくりと止まってくれました。戸惑っていると、笑顔でどうぞ…と譲ってくれます。ある時は道に迷ったのかと勘違いされ、親切に教えようとしてくれた人もいました。

ドイツ人はみんな親切といった印象を持ちました。

更にクラブ視察では、コルシエブルロイヒ シニア世代スポーツクラブやオルケン体操クラブを視察し夕食会でお世話になりました。あたたかく迎えていただき初対面と思えないくらいで国や言葉が違ってても距離を感じさせないほど、打ち解ける事が出来ました。本当にドイツは優しい国、ゆったりと時間が過ぎていくといった印象でリラックスして研修に臨むことが出来ました。

ドイツのクラブの歴史と現状

ドイツのスポーツの歴史は長く、時代とともに変化し従来の競技スポーツから、生涯スポーツに関心を持つ人が増えてきました。1970年代にフィットネスクラブが出現し、スポーツに対する求め方が変わり自分の健康を意識したり自分の体形を気にするようになり、スリムな体を求める女性も増えてきた。また、クラブに属さずに個人でジョギング、サイクリングなどをする人も増えている。健康の為、楽しむためにスポーツをする人が増えていることから、クラブではそういった人たちのニーズに答える事も重要で今後クラブに属する可能性を秘めていると捉えています。まさに、現在の日本のスポーツと同じでドイツの歴史の後をたどっていると感じました。

ドイツのクラブは行政、大学、企業、保険会社などのスポンサーから協力を得ていて連携がしっかりしてうらやましい。ですが抱えている問題も日本と同じで、クラブの主な収入源は会費収入でいかにして会員を獲得していくか、というのも課題でした。また、民間の営利目的のクラブ(フィットネスクラブなど)と競合しているといった事なども同じでした。

今回視察したクラブの施設は予想を越える素晴らしさでした。どこも充実していて年代、種目に応じた練習場が敷地内に詰まっている。話には聞いていたクラブハウスの中にあるバー。ドイツではスポーツ観戦をしながら昼間からビールをお水代わりに飲むという認識がありましたが、本当だろうか・・・ビール好きの私はそれも見てみたい、と思っていました。実際、目の当たりにして感動、

嬉しくなりました。人とのふれあいを大切にする国柄が伝わってきました。いつか自分のクラブでも実現したいなんて思ってしまい、まずはクラブハウスにサロン機能を備えたカフェを充実することが夢です。

研修を生かして

私が初めて北海道から第1号としてドイツ研修に参加した事は、とても意味のある事だと思っています。北海道は本州に比べスポーツに対する意識が10年以上遅れていると感じています。私の役目は、クラブのスタッフや北海道内の総合型クラブ関係者にドイツのスポーツクラブの歴史や現状を伝え、学んだことを自分なりに伝えていく事だと思っています。抱えている問題も日本と変わりはない、決して別世界ではない、そんなにかげ離れているわけでもない。自分が感じたことを少しでも多くの人に伝え、今後のクラブ運営に役立てるといったら大げさかもしれません。ヒントになればと思っています。

最後に

海外研修では、事前の準備などいろいろと日本体育協会の方にはお世話になりました。また、一緒に参加したメンバーの皆さんのおかげで楽しく研修を終える事が出来、大変感謝しています。これからも、クラブ間で連携をとりながら交流していけたら最高です。

そして、新たに目標が出来ました。今回の研修で、ドイツが抱える問題があることを知り今後どのようにして問題に取り組み、解決して行くのか。数年後のドイツはどんな風になっているのかを確かめたいという思いにかられ、5年後、10年後、15年後、いつになるか分かりませんが、もう一度ドイツに行きたい！という目標です。たぶん、思ったら実行に移すという変なポリシーを持った私の事だから実現するはずです。とにかくドイツ研修は自分にとって大きな影響を与えた事に間違いはなく、今後クラブを運営していく中で糧となり知恵となって行くことでしょう。

団員：古川 雅秀

財団法人福島県体育協会 会津広域スポーツセンター チーフマネジャー

はじめに

文部科学省が総合型地域スポーツクラブモデル事業を平成7年に開始して15年が経過した。福島県でも平成11年度から広域スポーツセンターモデル事業を受託し、14年に広域スポーツセンターが創設された。福島県においても11月現在で82クラブが設立されている。少子化の影響や社会構造の変化により、子どもの遊び場や大勢で遊ぶ機会が少ないこと、高齢化や平均寿命が伸びたことにより余暇時間の増加など、総合型クラブに対する期待はますます増えるばかりである。

私自身は3年前に広域スポーツセンターに転勤になり、「総合型地域スポーツクラブ」と名を初めて耳にすることになる。この新しい生涯スポーツのシステムに戸惑いもあったが、ドイツ研修に参加して、私なりにその戸惑いが薄れてきていると感じられる。総合型地域スポーツクラブは何ぞや？それは最後に記述したいと思う。

ドイツのスポーツクラブ

ドイツでは1819年に最初のスポーツクラブが設立された。その歴史は約200年であり、現在までには約90,000のクラブが設立されている。日本の15年とは比べものにならない。今回の研修に訪れたライン・ノイス郡では400クラブで約120,000人の会員が活動している。人口が440,000人のため、約30%の住民が参加している。3人に1人がクラブ会員であることには驚かされる。また、ドイツは移民が多いため、クラブでスポーツをすることにより民族の交流が図られ、スポーツクラブが社会的役割を果たしてきたようである。

クラブの運営形態の特徴としては、ライン・ノイス郡のクラブは73.2%が会員数300名以下のクラブである。つまり、小規模の会員数で運営して



左端が古川氏

いるクラブが大多数である。また、非営利クラブのほとんどは州や郡の自治体から助成金を受託して運営され、クラブの役員や指導者はボランティアとして献身的に活動している。つまり、会費と助成金と無償のスタッフで運営されている。しかし、補助金は日本と同様に年々助成金はカットされているため、今後の活動を継続させるためには課題が多いようだ。

活動種目の特徴としては健康志向コースが多い。特にドイツは心臓疾患による死因が多いため、ヘルツスポーツといわれる有酸素運動を活用した心臓疾患予防教室が開催されている。ドイツ滞在中での食事はステーキやソーセージ、ハムなどの肉食系、デザートも日本より一回り大きなケーキなど、そんな食生活をしていれば肥満傾向で心臓に負担をかけるようになるのもうなずける。

先進国共通の悩み

少子化や家庭環境の変化、スポーツに対する価値観の多様化、それはドイツにおいても日本においても同様であり、先進諸国の共通の課題であると感じた。

ドイツでは日本の小学校にあたる基幹学校が、半日制が多く午前中で放課になるため、午後は基幹学校をスポーツクラブに開放して活動が行わ

れていた。そして、放課となった子どもたちの約30%がクラブに所属し、クラブに所属していない子どもたちは家庭や地域などでおの活動をしてきたようである。しかし、最近では全日制の基幹学校が増加傾向にある。その原因は核家族化や共働き夫婦、欠損家庭の増加により、午後帰宅した子どもたちを家庭で面倒がみられないため、日本で行われている「子どもクラブ」の形態のように、学校で午後の時間帯に地域ボランティアやクラブ関係者に依頼して、子どもたちの面倒を見るようになってきている。そのため、子どもたちのクラブ加入率は現在20%までに落ち込んでいる。つまり、日本は子どもたちの体力の低下など、少子化による様々な課題に対して、学校体育から総合型クラブなど地域スポーツへの転換を目指しているが、ドイツではクラブから学校へと活動が変化しつつあるという全く逆の発想であることが面白い。先進諸国の共通する課題の解決に向けて、伝統文化からの脱却や諸外国のシステム導入など、斬新なアイデアの発想が必要であることを感じた。

研修をとおして感じたこと

1 日本における総合型地域スポーツクラブの必要性

黒須充先生が監訳された「ドイツに学ぶスポーツクラブの発展と社会公益性」の中にも書かれていたが、ドイツのスポーツクラブは公共の福祉に役立っているとのことであった。つまり、移民が多いドイツにおいては、東西ドイツ統合など、200年以上もの歳月をかけ、人々がスポーツをすることにより交流がなされ、そこでコミュニケーションが図られ、地域づくりに寄与していると実感した。日本の場合においても、昔、盛んに行われていた「盆踊り」などの年中行事や、子どもの健全育成をねらいとした地区子供会や、青年団や婦人会、または老人会など、個人主義を重視する現代において、ネットワークを構築する組織が形骸化している。体力づくりや健康づくりだけではなく、その延長線上にある究極の目標として「地域づくり」の

ためのスポーツクラブでなければならないと思う。子どもから高齢者までの地域住民がスポーツをすることにより交流が図られ、顔見知りとなり、あいさつをかわすことで、現代に希薄している地域コミュニティの形成につながるのではないかと。また、子どもたちにとっては、地域の大人たちにスポーツという楽しみに育まれ、地域の方々に育てられたという郷土愛が芽生えるのでないだろうか。そして、子どもたちが成長して大人となり、郷土に戻って地域のために活動するという好循環が生まれるのではないだろうか。

2 子どもたちにとっての総合型地域スポーツクラブの必要性

昨年、文部科学省委託事業で総合型クラブのイベントを視察した。内容は自然の中での缶けりである。我々が小学生のときに毎日のようにやったので懐かしく感じた。参加者は小学校1～6年生まで30名である。初めてやる子どもも多く、コツがつかめなかったようだが、時間が経つにつれ、鬼は面白いように逃げ回る子どもを捕まえる。捕まった子どもは空き缶の近くのエリアで捕虜にされ、捕まっていない子どもが缶を蹴るまでつまらない時間を過ごす。そこでルールを破って捕虜が缶を蹴り出す。鬼は怒って些細な口喧嘩が始まる。このことはルールを守るという社会性を身につけることとなる。しかし、現代において一番安心な遊びは「テレビゲーム」である。少子化で遊ぶ子どもがいないことや、防犯上の問題で遊ぶ場所が少ないなどで、身体を動かす機会の減少や大人数での群れ遊びの減少など、このまま体験せずに成長したらどうになってしまうのかと心配になる。つまり、総合型クラブで意図的にそのような遊びをしかけることが重要ではなからうか。そして、身体を動かすことによるストレスの発散、群れ遊びによる社会性などを子どもたちに身につけさせることは重要ではなからうか。

3 今後のクラブ支援

ドイツの非営利クラブは公共団体から助成金を受託して運営している形態が多い。昨年文部科学省から発表された「スポーツ立国戦略」で

も、総合型クラブの現状について触れられ、運営面で苦慮しているクラブが多いことも指摘を受けている。しかし、ドイツの200年と日本の15年では歴史が大いに違う。まだまだスタートを切ったばかりの日本の総合型クラブである。15年で結果を求めるのは時期尚早である。行政の金銭的な支援も含めて長期スパンで支援しなければならぬことを大いに感じる。

4 日本の学校教育

先進諸国は少子高齢化や核家族化などの課題は共通しており、その課題解決のためのひとつが日本では「総合型地域スポーツクラブ」であ

る。しかしながらドイツでは、その課題解決のための方法として学校教育に依存しようとしている。同じ先進国であるが、二つの別な手段を選択している両国を客観的にみると、日本における学校教育も世界に誇れるものであると感じた。

最後に今回このような貴重な研修に参加させていただいた日本体育協会職員の皆様や黒須先生をはじめドイツでお世話になった先生方に感謝いたします。

団員：飯塚 裕

NPO法人スポーツクラブバンビィ事務局長

すべてが血となり肉となる。

はじめに

私にとってのスポーツとの最初のかかわりは、幼少年期に同世代の方であればどなたもが通ってきたような近所の神社探検、収穫後の田んぼでの鬼ごっこ、即席ルールの三角ベース、お手製カマクラを基地にした雪合戦など、とにかく遊ぶ=生涯スポーツと思しきことが頭をよぎる。

ドイツへ向かう12時間もの空の上で、久々に昔のことに懐かしさを覚える空間が私の頭の中にも出来たようで、なぜか年甲斐もなく込み上げてくるものを感じた自分に現状の不がい無さのギャップがどこにあるのか、総合型地域スポーツクラブ最先進の地「ドイツ」で確認することが目的の一つでもあった。

幼少年期の競技スポーツとの出会いは、幼稚園の運動会での徒競走であり、スポ少組織が私ども地方の片田舎にはまだなく、町内会の子供会が夏休みを利用した地区のソフトボール大会や中学校の部活動であった。

いずれの時を振り返ってみても、単なる懐かしさだけのものではなく、そこにあったコミュニティの中で、ルールを教わり、技術のアドバイスを受け、多世代の人とのふれあいに育まれてきたことに、今更ながら一流でも、二流でも、三流でもないそれ以下の私に生きる自信をつけさせていただいたことへの感謝の念でいっぱいになって、ドイツへの第一歩ミュンヘン空港への到着となり、デュッセルドルフ経由で目的地のグレーベンプロイヒ市。時差による眠気もそぞろ拠点の「ホテルゾンダーフェルト」、まずは部屋に入るためのカギに悩まされた、デュッセルドルフ空港からご同行いただいた黒須充教授は簡単に操作すれど、私がやるとその気配もないと摩訶不思議なカギ開けに、黒須教授から「ドイツに慣れるように



すぐ慣れますよ。」と悩みのつきない研修になるのかとの不安を癒して戴く言葉に励まされ、翌日からの研修に改めて意欲的に取り組んだ。

研修初日

ライン・ノイス郡スポーツ局長ユルゲン・スタインメッツ氏ならびに、ケルンスポーツ大学スポーツ社会学主任教授フォルカー・リットナー氏の表敬訪問、引き続き講義①「社会の発展とスポーツ」、この研修期間で一番お世話になったラインノイス郡スポーツ相談課アクセル・ベッカー氏の講義②「ライン・ノイス郡のスポーツ」をそれぞれ受け、通訳の多田茂氏と井出鉄矢氏から伝わる事物の解説に理論的で、その考えを明快に説かれる内容に、「あれ、このような環境!」と、そのぐらいスポーツの沿革にまで触れながら話し合うこんな姿勢と場を自分は求めていたことに気づいた。

日本では、俗に「理屈っぽいと嫌われるよ。」などと評されますが、気忙しい日々の生活の中にあっても、リスクを感じさせない場づくりは、クラブマネジャーの第一の使命かと感じた。

昼食ともなると、この研修期間に食べた肉料理は、私が日本で食する1年間に匹敵するぐらいのボリュームに圧倒したが、午後のコルシェンプロイヒ市へ赴きスポーツ課長ハンスペータ・バルター氏の講義③「自治体のスポーツ振興」につい

て中世を思わせる建物がクラブハウスという中のリビングルームのような大広間にて受け、採った昼食これが血となり肉となり、隣国との共存を強いられた民族が息づくことへの文化なのかと、愚頭な私にも伝わってくるものがあった。しかし、さすがにその後バスで移動した先のクライネンブロイヒにある『シニア世代のスポーツクラブ』視察①の中でのご高齢者の健康ケアメニューの中に心臓循環器系の医師も関わるプログラムを取り入れ、食生活への配慮にも取り込まれる姿勢が印象的だった。7～80歳代が中心の理事の皆様との懇親会には、手作りのケーキの花も添えられ、甘いモノ好きの私にとっては、おいしくも貴重な世代を超えた意見をいただいた。

その後、引き続き理事の皆様との夕食懇親会を兼ねたドイツポーリング（ケーゲル）を楽しませていただいた。なるほど、日本ポーリングルールの硬さも良いのかもかもしれないが、ケーゲルの柔軟さに、その仲間が提案した即席ルールに則り楽しむ姿は、私が以前遊びで学んだ『三角ベースだ。』、そんな気持ちを抱いた。

渡航前に行われた事前研修の中で前回の経験を踏まえ、「その日の研修内容は、その日のうちにある程度、まとめておかないと中身が濃すぎて整理できなくなる。」との説明に、夜は眠い目をこすりながら遅くなっても整理に明け暮れる3日間となった。

研修2日目

アクセル・ベッカー氏の講義④「スポーツクラブの健康志向コース」においては、広がる健康志向をどの世代にもではなく、ターゲットを絞ったメニューづくりに力を入れているとのこと。たとえば、スポーツで貢献できるものとしての心臓循環器系、姿勢運動、ストレス克服運動、高齢者健康、子供健康促進などの絞り込んだ提供が図られている。多様目、多世代、多志向へとそのスポーツクラブ独自の地域に根付いた活動が望まれている中へのしくみづくりの足がかりとなりえるものを確信し、メンバーの興味の的でもあるドイツのスポーツクラブ事情について時間のほとんどを質

疑応答に切り替えていただき有意義なものとなった。

ライン・ノイス郡スポーツ相談課ギーセラ・フーク女史による講義⑤「スポーツクラブと小学校の連携」についての得られる利益が興味を引いた。学校とクラブが互いに子供に責任を持ち、学校にないプランをクラブが提供し、社会的貢献の責任は生まれるが、積極的に変化を受け入れ子供のサポートに向くようになり、よりフレキシブルにスポーツの長けている子にクラブの専門性を提供し、そうでない子は学校に留まりサポートを受けることにより長期的な活動の場を得る機会が生まれるのと施設の有効活用できるようになるなど、私どもクラブが追い求める学校支援の仕組みが確認出来たことと、注視しなければならないことがはっきり見えてきた。

講義⑥ヤン・カペレン体操クラブ「クラブマネジメント」について、クラブ会長のヴィンフリート・シュミット氏より現状を拝聴した。105年という歴史にも驚いたが、1800人という会員と15種目毎週50の異なったコースを提供しているとのことさらに驚かされたが、そんなクラブでも常に課題を持ち、活動展開されていると伺うと背筋の伸びる思いがした。

その後、徒歩で移動可能な距離にクラブ視察②、③ができるクラブ間のエリアの狭さに興味を持った。②「TUSグレーベンブロイヒ」行政から支援を受けながらも自前のサッカー場とクラブハウスを持ち、100年の歴史を持つクラブ、訪問した時間帯が夕刻に差し掛かる頃で学校を終えた子供たちがお揃いのジャージを身につけた数名のボランティア担当コーチのもとへ参集し、トレーニングを開始する風景は芝のピッチに相応しい風景でした。③日も落ち始めたころ伺った「オルケン体操クラブ」は、拠点ホテルからも徒歩数分のところにあり、敷地を会員の皆さんで均等に持ち、支える会員のあり方を長年培われクラブライフを送っている皆さんの充実した顔に自主自立の方向を目の当たりにできた。そのクラブでの夕食懇親会は、またアットホームな雰囲気の中、日本の歌、地元の歌、団員も最高の雰囲気に乗って高津の菊地氏のフラダンス教室、ウクレレで鳴らしたギター

独奏、総務担当の宮本氏による応援パフォーマンス入り混じり、自家製ソーセージを堪能し、歓喜ムードの心地の良さにスポーツクラブ会員の皆さんの思い入れを改めて感じさせていただいた。

研修3日目

早朝より小1時間の道のりをバスにて移動し、ドルマーゲン市へクラブ視察④「TSVバイヤードルマーゲン」という製薬会社所有だったスポーツ施設を譲り受けた国内でも有数の大型クラブの視察となった。会員数5,000人以上屋内で陸上の定期トレーニングが安定してできる環境、また需要が陸上からバスケット、ハンドボールへ移行すると施設を改造し、即応するクラブサイドの取り組む姿勢と軽快なフットワークの良さが印象的で野外温水プールで沢山の高齢者が水泳を楽しんでいる端の1レーンにドイツ水泳界の代表選手（スイミングキャップにドイツ国旗が描かれていた。）が専任コーチの下トレーニングする環境には目を見張るものがあった。講義⑦「クラブと施設について、子どもの体力向上、タレント発掘」について講師担当のアクセル・ヴェルツ氏より講義があった。この施設内にあるハンドボール専用の体育館（翌日、このクラブが抱えるプロチームのハンドボールブンデスリーガ観戦）のコンベンションホールで拝聴し、同氏もこのクラブ出身の陸上競技選手で活躍された方とのプロフィールを伺い、自分の育ったクラブで仕事ができる違った意味での生涯スポーツとのかかわり方、一人でも多くの雇用スタッフを抱え公益性を求めていくことの重要性を学んだ。引き続き同所に於いてハンスペータ・ケーニッヒ氏による講義⑧「学校とスポーツクラブについて」当然タレント発掘分野においても現在世界ランキング第3位のフェンシング選手など育成強化拠点としての機能を果たしている。特にフェンシング、ハンドボール、陸上、水泳の青少年養成を担っているとのこと。『地元のヒーローから国際的な選手を！』若い選手にとって模範となるヒーローの輩出を主眼に置いているこのスタンスは、私どものローカルクラブにはない発想、先進的かつキャパシティの奥深さを兼ね

備えたマネジメントをフルに発揮して、将来性のある子供たちにとっての理想的な姿かと感じた。正直、感心した。

午後の学校視察「ドルマーゲンの学校（ノベルト・ギムナジウム）」は、現在秋休み中で通常19名が寝泊まりしている寄宿舎内も閑散とした中、帰宅せず残っていた女子レスリング選手とあいさつを交わし記念撮影に快く応じてもらう、これからハンドボールのトレーニングに通う前の腹ごしらえをしている男子生徒3人組の食事は、体格以上の食欲を披露してくれた。この施設案内と併せて最終講義⑨「タレント発掘事業について」をタレント発掘事業担当のクリスチャン・ヘンシェル氏が務められ、さすがに日本にはまだ馴染みの無いシステムだけに研修生からも質問が飛び交いより中身の濃いものとなった。

夕方、答礼夕食会まで2時間余りの空き時間を利用しての市内探訪。商店街の活気が伝わり、文字も読めない私が街に溶け込んでいる不思議な感覚を味わった。

答礼夕食会に於いては、研修期間お世話になった、ベッカー氏、リットナー教授、黒須先生、通訳の多田氏、井出氏、文科省の猪股氏と団員15名、修了証書をいただくと肩の荷が下りたのかより馴染んできつつ和やかな会となった。

滞在4日目ともなると

拠点としたホテルの居心地にも慣れ、結局最後まで5、6回チャレンジしないと開かなかったドアの鍵、浴槽の無いシャワーコーナー、髭剃りに便利だった凹面鏡、200Vのコンセント、見ても分からないTV番組、今思っても違和感より懐かしさが先に出る良き経験となった。

ホテルを後にし、1FCケルンの施設、ケルン大学の施設見学、道路を隔てた広大な芝生の広場、サッカー場ピッチ20面が優に取れる中をポツンと犬の散歩者がいるだけ、芝のグリーンに吸い込まれる錯覚に陥っていた自分がそこにあった。

ケルン大聖堂を最上階まで拝観し市街一望に浸り、登堂記念コインも手に入れ、近くを流れるライン川の散策移動、スポーツミュージアムでドイ

ツスポーツ文化の歴史を垣間見た。1 FCケルンのコーナーに我ら世代のヒーロー奥寺は見つけられなかったが、日本でもお馴染み元ドイツ代表ピエール・リトバルスキーの若かりし頃の勇姿に、感動を覚えた。

その後、昨日クラブ視察で訪れた「TSVバイヤードルマーゲン」の試合観戦、この日はドイツ特有の荒れ模様の天候にも体育館施設内の雰囲気は全くと言ってよい別世界での盛り上がりの中での展開となった。研修初日の表敬訪問を戴いたスポーツ局長ユルゲン・シュタインメッツ氏も土曜の休日とあり観戦に来られ。ジーンズにブレザーでセレモニーの中で挨拶に立たれ、行政を代表した肩苦しさも無くソフトでスマートなイメージも醸し出されていた。地元チームは、強豪チーム相手に負けこそすれ地元の温かい声援にこたえている風景は、勝利至上主義ではない育ちを感じさせるものだった。

ドイツ最後の夕食は、黒須教授の提案もあり団員同士で店探しから始めることとなった。デュッセルドルフ市内は、ドイツの中でも比較的日本人も多く日本人向けの店もあるとのこと、「肉料理

はもういいから和食探そう。」などと皆で此処あそこ小一時間歩き廻った挙げ句、蕎麦屋さんに入り日本人の店員さんを見るとホッとし一層和み、団としてのコミュニティも深いものになったことを実感した。

最後に

全国から集まった団員、これこそ私の最大の宝になったようだ。

私の場合は無謀と言った方が妥当かと思うが、文化の違う国へ自ら手を挙げて集まったメンバーの心意気を感じた研修となった。

私のような単に指導者歴は長い、駆け出し2年目の総合型地域スポーツクラブ経験者とは異なり総合型では先駆といわれる方々と行動を共にさせていただいたこと、ドイツでの研修をこのように快適なまでに設定して下さった(財)日本体育協会をはじめとする関係機関に心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

団員：小野里 順子

うすねニュースポーツクラブ クラブマネジャー

動機

平成12年9月にスポーツ振興基本計画が制定され、それを機にスポーツクラブの立ち上げを決意し、平成15年12月3日、総合型地域スポーツクラブとして、うすねニュースポーツクラブを設立した。取り組みを始めてから10年が経過したが、その間、様々な問題にぶつかり、解決し、学び、修正し、再度事業を組み立て、スタッフと共に歩み続けてきた。

スポーツの意義とは？遊ぶこと、学ぶこと、楽しむこと。私たちは、学校の体育の授業や部活動を通じてスポーツに接してきた。総合型地域スポーツクラブを推進する中で、もう一度振り返り確認をしたい。10年前に見たドイツのスポーツクラブ紹介ビデオの風景が頭の中をよぎる。先進国の素晴らしい活動は今も私の心に残っているのである。200年という長い歴史の中で生まれ変わりつつあるスポーツクラブの中に足を踏み入れ、肌で感じ、自分の住む街に、県に、必要なスポーツと文化を学び、取り入れたいと思い、うすねニュースポーツクラブ会長、群馬県体育協会会長の推薦を頂き参加をさせていただいた。

旅立ち

10月19日、岸記念体育館にて最終打ち合わせを行う。皆、緊張した趣で最終確認が終わると15人の海外研修派遣団員の為に同会場で結団式が行われた。日本体育協会クラブ育成課の皆さんにより挙行され、一人ずつ決意表明をした。仲間の顔と名前が少し一致してきた気がする。その後、成田へ移動、空港内ホテルで一泊し、翌日12時20分フライトハンザ航空715便でミュンヘンへと出発。フライト時間は12時間で時差は7時間。足のむくみ、腰の痛み。眠らずに、ミュンヘンへ。乗り換えてから約1時間でデュッセルドルフへ到着。ホ



テルへ着くと、これから夕食である。しかし、日本時間で午前3時30分。今食べたらず太ってしまう…。翌朝8時30分にロビーに集合。今日から視察がスタートする。そこに、わくわくしている自分がいた。

初めて見たドイツの街並みは、テレビで見た風景と同じであった。夕食まで時間があつたので、近くのスーパーに買い物に行くと道に迷ってしまった。60歳前後と思われる女性がホテルまで送ってくれた。ドイツの人は親切である。スポーツクラブに行くと言った英語で子ども達に何歳かと訪ねてみた。すると、「14歳です」。週にどのくらいトレーニングに来ているかと聞くと「3回か4回」と答えてくれた。しっかり目を見て笑顔で答えてくれた。とても素直であった。地球のどこかでは争いごとが起きている。でも、この国の人たちの屈託のない笑顔。穏やかな国である。スポーツ200年の歴史は人々の心を豊かにしていた。

驚いたことがあった。日本で常識的なことはドイツでは通用しない。当たり前である。常識とは誰が決めたのか。日本では公共のマークは統一されている。しかしドイツでは、少し違っていた。ドイツではDamen（女性）Herrn（男性）トイレである。日本の公園や施設のトイレは赤と青のトイレマークがドアにつけられている。ドイツでは、DとHだが多種多様であった。これも、ドイツの文化であろうか。

一番うれしかったのは、ホスピタリティー。おもてなしのサービスである。どこのスポーツクラブに行っても、役員やスタッフの皆さんが、まず笑顔で迎えてくれる。そして、おいしいコーヒー・ジュース・水が置かれており、ご自由にどうぞと言葉を添えてくれるのである。日本ではどうだろうか、視察団を受け入れるときに1杯のお茶を有料ですというところもあるそうだ。

スポーツクラブの見学は、プロとして選手を送り出している大きな施設を持っているクラブから100人以下の小さなクラブまでいくつか見学をさせていただいた。できれば、クラブへ仮入会して、入会手続きの仕方からプログラムの内容など具体的にどの様な活動をしているのか体験してみたかった。

まとめ

ドイツのことを調べてみた。ドイツは、人口約8,200万人、ヨーロッパではロシアに続く人口である。地形・気候とも日本に似ており梅雨はないが四季がはっきりしている。面積は、日本とほぼ同じくらいで357,021km²、世界の中で62位。ちなみに日本は61位である。ドイツは、16 (land) 州からなり440 (kreis) 郡で構成されている。

青少年のスポーツは、地域スポーツクラブが受け皿となっている。スポーツクラブの数は、10年前が86,000、現在は91,000のクラブが存在し国民の3分の1が会員として登録をしている。

ドイツでは、地域スポーツクラブへ入会することにより州スポーツ連盟、及びドイツスポーツ連盟に加盟することがシステム化されている。200年という長い歴史を重ね巨大組織へと成長したドイツを見て新たに感じたこと、それは、会員や指導者など自由な意志で活動をおこない、各機関がパートナーとなって活動をしている。そして、スポーツを促進するために国家連邦が支援する仕組みが作られている。ここがドイツスポーツクラブのしっかりしている最大の理由であろう。自分たちのクラブの課題とするところでもある。

国としての大きな事業を行うためには、経営学としてのシステム化が求められているのかもしれ

ない。スムーズなクラブ運営ができる仕組みづくり。会費のみの運営はドイツでも難しいようだ。200年の歴史を経た立派なドイツのスポーツクラブも同じような悩みを抱え運営をしている。人口の減少、だが、スポーツクラブの会員数は横ばい。クラブの運営をするスタッフのボランティア精神がここに隠れているのだった。このボランティア精神を育てているのが運営の3原則なのだろう。

ドイツに学ぶクラブ運営の3原則。これがドイツのクラブ組織を強化している大切なところであると感じた。「自立・補充・協働」である。日本の場合、プラス「情報」も必要かと思う。これからの私たちのクラブに必要なようになってくることだろう。日本のスポーツも100年もの歴史を経て、新たなスポーツ立国戦略を掲げ、スポーツの文化を確立すべく動き出している。クラブを取り巻く社会環境の変化、地域住民のニーズの多様化などにより、新たな施策が求められている。今回の先進国での内容を日本のスポーツクラブへ生かしていきたい。

感謝

今回の研修に参加させていただき、ありがとうございました。

忙しい毎日の生活から少し離れ本当に充実した一週間でした。丸山団長をはじめ15名の団員の皆様方、旅慣れない私ですが、とても、楽しく同行させていただくことができました。本当にありがとうございました。

また、昨年度海外派遣団員としてご活躍されております体育協会の金谷さんをはじめ、派遣団員OBの皆様にお出迎えいただき心がほっと和みました。ドイツへ行ってきたという満足感とともに、「ありがとうございます」という感謝の気持ちもうまく伝えられぬままお別れしてしまい申し訳なく思っております。また、再会できることを楽しみにしながら、今回の海外研修で、出会った人たちに感謝し、一生の宝として私の心のアルバムに貼りつけておきましょう。

そして、皆で誓った**総合型の輪を新たな一歩として踏み出しましょう！**

団員：前田 佳也

小糸レインボークラブ 事務局員（クラブマネジャー）

ドイツのクラブは、地域のボランティアに支えられながら「おらがクラブ」として、200年近い歴史のなかで発展し、9万1千のクラブ、人口の3分の1にあたる2,800万人の会員を擁す巨大な組織に成長した。しかし近年、個人主義化の進行や価値観の多様化、学校の全日制への移行などクラブを取巻く環境も変化し、新たな対応を迫られている。

1 海外研修会への申込み

昨年この海外研修会に参加したニッポンランナーズのクラブマネジャー、亀野さんと県のクラブ会合でたまたま席が隣同士となった。そういえば、1月に参加したクラブマネジャー更新研修会するとき、写真を紹介しながらドイツの研修報告をしてくれたのを思い出した。そこで、ドイツのことを聞いてみたら、最初はあまりにも遠い存在で違和感を持って見ていたそうで、年を重ねるごとに少しずついろんなことが見え始め、さまざまなクラブ形態が知りたくなって参加したと話してくれた。

それからしばらくして、この派遣団の募集案内が市の教育委員会から届いた。県体協への提出期限は5月31日、あと2日、時間がない。実際、ドイツのスポーツクラブについては、亀野さんの話とそのときの資料、ずっと前に研修で見たサッカークラブそして立派な施設を思い出すだけの知識しか持っていなかったが、クラブも一応軌道に乗り、自分自身、次の何かを探したいとも考えていたことから即決、申込みに至った。

2 日本からドイツへ

出発の前日、最終打合せと結団式が岸記念体育館で行われた。団員のみなさんとは、事前研修会以来の再開であるが、緊張の色もなくみんな元気



そうだ。土産品のなどの割振りや結団式も和気あいあいのなか終了し、体育協会の職員約10名の見送りの中、バスは一路成田へ。

昨日の成田入りのおかげにより、出発当日は実に時間に余裕があった。

チェックイン（荷物）…出国検査…45番ゲート
出発～ミュンヘン～デュセルドルフ

ミュンヘンまでのフライトは約12時間、手足のむくみと強張りに耐えながら、申訳なく席を立ち機内をウロウロ…。デュセルドルフまでは1時間少々、夕日と群青色の空、素晴らしい…。

無事デュセルドルフ到着、黒須先生も出迎えもいただいた。ホテルまでの移動はベントのバスだ。バスの中、ベッカー氏のあいさつを井出さんが通訳してくれる。「プログラムの重点はスポーツクラブだが海外の文化も学んでほしい。また、謙虚で控え目な殻を破って、好奇心旺盛で質問をどんどんしてほしい」とベッカー氏からのアドバイスをいただく……

“謙虚で控え目な殻を破って” その通りである。この先の研修を見透かされているようで少し心配になった。成田を出発して15時間半、グレーベンプロイヒ駅前のホテルズンダーフェルトに着いた。

3 ドイツのスポーツクラブ

今回の自分自身の研修テーマは3つ①スポーツクラブの発展の経緯やスタンス②クラブ経営のノウハウ③地域におけるクラブの位置づけ、そして伝統の重さなどを直接肌で感じ取り、今後のクラブ活動に生かすことだ。

黒須先生の本によれば、クラブの起源は、フリートリッヒ・ルートヴィヒ・ヤーンが1811年からベルリンのハーゼンハイデ体操場で始めた体操の訓練まで遡る。その後1818年までにプロイセンに150くらいの体操のグループが誕生したがまだクラブとはいえず同好の集まりであったようだ。ちなみに、現存する最古のクラブは、ハンブルグ体操クラブで1816年に設立されている。日本では、まだ江戸時代後期、町人文化（化政文化）が栄えた時代である。

それからゴールドンプランの実施で急速な発展を遂げ、ミュンヘンオリンピックを経て約200年、スポーツクラブは「あらゆる人々の自由意志に基づいたスポーツ及び文化活動を公的に支援する社会的な機関」として、クラブ数約9万1千、会員数約2,800万人（ドイツの人口約8,200万人）を擁す巨大な組織に成長した。

こうした発展の背景には、学校体育に対する制度にも違いもありそうだ。何度かここが〇〇学校ですという場面が移動中にあった。日本の学校と明らかに違っている。それは日本で三種の神器といわれている運動場、体育館そしてプールの設置が学校にそろってないことだ。あとで調べたことだが、ドイツの教科にスポーツが登場したのは70年代初頭のことで、学校では身体を使う遊びが中心、スポーツは学校以外の施設、要するにスポーツクラブで行うのが一般であるということだ。双方で補完・連携しながらスポーツ教育が進展してきたと同時にクラブの発展へも繋がっている。

クラブ経営は、基本的に法人経営で、e.V. (eingetragener Verein：社団法人) の表記をクラブフラッグや看板などでよく目にした。法人クラブ全体の納税額は年間約8億2千万ユーロ、これに対し年間約5億ユーロの公的助成金を受けて、3億ユーロ（約336億円：112円/€）ほど

納税額が上回っている。この公的補助金と住民の手の届く月額12ユーロ以内（約1,350円：112円/€）の会費、そしてボランティアのスタッフによりクラブは営まれている。また、ドイツ全体の70パーセント強のクラブが300人以下の会員で、財政的に厳しく有給者はコーチなどの指導者に限られているようだ。加えて、この助成金は年々削減されており、特にこの2年間で平均60パーセントも削減され経営をより難しいものになっている。対応策として会費の値上げや寄付金を募るなど財源確保に取り組んでいるが、根本的な解決にならない状況で、3分の1のクラブが赤字経営となっている。

以上がドイツのクラブの概要であるが、これらを踏まえて訪問先でまず感じたことは、地域の人による、地域に根差した、地域のクラブという印象で、日本のクラブの存在と変わりはないことだ。ただし、大きく異なることは、その伝統の深さや施設の規模である。今回訪問したクラブは（コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブは不詳）全て1900年前後の創立であり優に100年を超えている。どこのクラブハウスにも、その象徴ともいえる旗やワッペン、受賞したカップ、当時の写真などが飾ってあった。所属意識とともに親から子、子から孫といった次世代へ守り受継がれてきた品々、「おらがクラブ」そのものに見えた。近年、この大きく発展してきたクラブにも時代の波、人々の意識に変化が生じている。組織の中でなく自由にスポーツを楽しみたい人が増加したことや健康志向により従来の競技型からフィットネス系へ移行していることなどである。また、ボランティア活動に対する考え方も変わった。加えて、学校の全日制への移行など課題も生まれている。

4 まとめ

1週間のドイツ研修で、講義や視察を通して、クラブ歴史や組織、財政状況など多くを学んできた。特に自分のテーマであった「伝統の重さなどを直接肌で感じ取ること」は十二分にできた。

訪問したどこのクラブにも飾ってあった写真やカップ、クラブの象徴ともいえるフラッグ・ペナントどれをとっても深い歴史であり、よく守り受

継いできたことだ。その時代々に即したやり方で絶やすことなく現在まで至ったこと、本当に素晴らしい。

また、ドイツでは「おらがクラブ」の考え方も少しずつ変化してきているようだが、運営する側は、当然このことばに誇りを持っているはずである。実際、自分たちのクラブも、このことばで成立っていて、クラブとの一体感や達成感などを生んでいる。大切にしていきたいことばである。

加えて、ボランティアの意識調査で、調査した3分の2の人は意識が高くボランティアでスポーツをしようという意欲がある。その時、日本ではどのような結果になるかも興味深いとベッカー氏の発言があったが、こうゆうところがまだ浅いのか、悲しいかな…うちのクラブには意識が高い人が少ないようで三役で悪戦苦闘しながら運営している。

日本にはない制度で普及させたらいいと思った

こともあった。健康スポーツに対する保険会社の補助という考えだ。「保険に加入している人々はいわゆる会員で、会員が健康でいてくれることに協力することは我々の使命」合理的ともとれるが是非日本でも広めてほしい。

コルシェンプロイヒシニア世代スポーツクラブの年代に即した種目の数々そして懇親会時に行ったゲール、オルケン体操クラブでの懇親会など、どこのクラブでも温かく迎えてく本当に楽しく有意義に過ごすことができました。

丸山団長はじめ団員の皆さん、事務局の宮本さん、黒須先生、ベッカー氏をはじめライス・ノイス郡のスポーツ局の皆さん、視察先のクラブの皆さん、通訳のスタッフの皆さんありがとうございました。

いつの日か、日本のどこかのクラブハウスのバーカウンターで、サーバーからビールを注ぎ、乾杯できる日を夢見ています。

団員：菊地 正

特定非営利活動法人 高津総合型スポーツクラブSELF
副理事長・クラブマネージャー

昨年、第一期の海外研修応募があった時、是非参加をしたいと思い応募する予定だったが、どうしても日程が合わずとても残念だった。次はいつの事かと諦めかけていた時、神奈川県体育協会から22年度募集の話を聞き、何があっても参加したいという気持ちで、応募した。夢が叶い内定を受けた時、大きな喜びと責任を感じる事となった。クラブ準備から無我夢中の7年が経ち、沢山の人にお世話になり、沢山の人と出会い、こども達から大きなパワーをもらい充実したクラブに成長する事が出来たと思う。この先の目標を是非ドイツに学びたいという思いで一杯だ。これから次の世代にどう引き継ぐか。生活の一部となる存在にするには。行政とどうパートナーシップを取っていくか。課題をいっぱい持ちドイツに向かう事になった。

前日、成田で一泊夕食、朝食を共にした団員はすでに一致団結。団員全員が大きな期待に胸ふくらませ、さまざまな会話が飛び交った。すでに気持ちはドイツに行っている。フランクフルト経由の13時間のフライトも私はあつという間であった。いよいよ翌日からのかなりハードな研修が始まる。

翌日、第一の講義ライン・ノイス郡庁舎での講義へ徒歩で向かった。ドイツの街並みや行き交う人々は何故か初めて訪れたドイツなのにとっても親しみやすく、何の違和感もなく私を受け入れてくれた。とても質素で、とても綺麗で深い歴史を感じる素晴らしい街だ。いよいよ講義の開始である。今回は私のテーマは、先にも述べたように行政との連携、協働、パートナーシップといった所を学びたいと思った。なぜなら施設等の環境づくりは我々にとってはどうにもならない部分と考えるからだ。当初、ドイツのクラブの規模、運営方法等かなりの違いがあるので、日本のクラブに導入できる点がどのくらいあるのか、疑問であった。しかし、ドイツのクラブの70%が300人以下で、月



会費も5ユーロから10ユーロ程度と、日本のクラブと殆ど一緒ではないか。150年以上の長い歴史を持つドイツのクラブも、日本のクラブにかなり近い物がある事を知り、沢山のものを持ち帰る自信がついた。

興味が一番あったのは、施設面である。ライン・ノイス郡は44万人の人口、350以上のクラブ、12万人のクラブ員を抱え、施設がどれだけあるのかだ。訪問したクラブは大きな規模のクラブを除いては、殆どがクラブハウスを持つだけである。実際の活動は、行政の施設を共有しているのだ。しかし、このクラブハウスの存在がやはり大変重要なようだ。どこのクラブハウスも長い歴史を感じるとても素敵なクラブハウスであった。この雰囲気の中で行われる講義、会議はさぞスムーズに進む事が理解できる。我々の講義もドリンク、お菓子が置かれたテーブルでとてもリラックスした雰囲気での講義が進められた。その肝心の施設だが、体育館、建物は、想像していたよりかなり、簡単な造りのものが多い。極端に言うとプレハブ造りより少し頑固な物。そんな感じすらする。照明も水銀等ではなく蛍光灯。しかしそこには必ず2000人～3000人の観覧席があり、クラブの活動からトッププロの試合までが行われる。ここに多くの地域の人々が集まり、スポーツを楽しみ、プロチームを応援する仕組みがある事に気がついた。生涯スポーツから競技スポーツまで一つの輪の中にあ

る大きな要素だ。

TSVバイヤードルマーゲンのプールでは、外気5度位の中、屋外プールで沢山の人がスイミング中。勿論、水温は29度と快適のようだ。ここでも目を疑うような光景があった。高齢者の水中ウォーキングと同じプールで、ドイツのオリンピック候補選手が練習中だ。コーチも選手も気軽に声をかけてくれる。ここにも一つの輪があった。最終日にはケルンスポーツ大学の施設見学ができた。休学日での施設まで見学できなかったが、周りにあるサッカーグラウンドが10面も取れる大きな敷地が全て芝生。一般の人が自由に散歩、サッカーを楽しんでいた。これは真似できない。この後、TSVバイヤードルマーゲン体育館に戻り、ハンドボールのプロゲームを観戦。昨日見学した体育館が、見事に様変わりし、2800人の観客を集める大スタジアムに変貌していた。見事だ。地域のファンがタイコ、笛、楽器を持ち込み、おそろいのジャージをまとい夢中になって応援している。日本の企業スポーツ、プロスポーツもこの形を作らないと、生きていけないのでは？と強く感じた。ドイツでは、今まで半日制であった小学校も、共

働き、離婚等の増加で子ども達をもっと学校に居させて欲しいとの要望の中、全日制の学校が増えてきている。と同時にクラブ員の減少がみられ、学校との連携が不可欠になってきている。日本に於いても学校との連携が不可欠と考える。学校の施設を子ども達への教育の場所だけと考えず、地域の財産として活用できる様、行政の支援が必要だ。さらに今回強く感じたのは、特に首都圏ではこの地域の学校施設を、ドイツのように学校体育、地域スポーツ、企業スポーツ、プロスポーツ又は文化活動の拠点としての施設づくりを将来に向けて考えるべきではないか。この事により、行政、学校、地域、スポーツの一つの輪が出来るのではと強く感じて無事に日本へ戻って来ました。

あっという間の8日間でしたが、とても大きな目標が見えてきた今回の視察でした。最後に財団法人日本体育協会の皆様、宮本さん、団長を初めとする団員のみなさんドイツの先生方やクラブの皆さん。沢山の方々にお世話になり、この貴重な一生に残る体験を頂きました事を今後の活動に大いに反映させる事をお約束いたしまして、御礼を申し上げます。

団員：長尾 香織

みわスポーツクラブ 事務局

海外研修事業への参加の動機

総合型地域スポーツクラブにかかわって数年が経とうとしている。「地域住民が自主的、主体的に運営し身近にある公共スポーツ施設等を活用し家族全員で加入しても負担がかからない程度の会費で誰もが生涯にわたってスポーツに親しむことが出来る組織構造と理念をもったスポーツクラブ」私は、日本で夢のようなクラブづくり（地域密着）が可能なのかという疑問をいただいていた。民間クラブの指導者として少し働いていたが、地域住民で受益者負担の運営を行っていくことが可能なものなのか不安をいただいたまま、地元のクラブが立ち上がった。事務局として日々、目の前の処理をする事が精一杯だった事、企画や事業が空回りしているのでは？というあせりと地域に浸透してないのでは？という不安を重荷に感じていた。そんな中クラブマネジャーの勉強をしており以前より少し視野を広げることができた。そこで脳裏に浮かんだのは総合型地域スポーツクラブ発祥の地へ行ってみたいという強い思いを抱くことになった。実際に現地を見て感じたいのと自分に今足りないものがわかるかもしれない。今よりも少しは地域の人にクラブライフを楽しんでもらえる環境づくりのヒントがもらえればという思いを抱いた事がきっかけで申し込んだ。この研修は今まで人生の中で一番思い切った行動だった。

学び感じ得た事

ドイツ事情の背景には、第2次大戦に敗れてから復興に取り組んだ努力が国際スポーツ界で頭角を現し、また経済の発展もめまぐるしく進化したのが、急激に国民の健康をむしばみはじめた。これをきっかけに対策をとって行われたことは、この状況を国・州・自治体の共同責任ととらえ力をあわせ打開策として進められたのがゴールデンプラ



ン（健康は人間にとって黄金のように大切であるという意味で命名された）。これは基本的に身体運動をおこなう場づくりに整備が最優先とされ活動の場の整備計画されていた事で現地のクラブ活動が地域密着に繋がっている。

このゴールデンプラン（施設整備基準）の時期に行政区の統合があり以前は自分のいた地区の公共施設しか利用できなかったが統合により各施設を利用できるようになり、この地区統合をクラブ側が積極的な考えでとらえて発展につなげていった。

そして豊かな環境とスポーツクラブを支える地域コミュニティの自発的活動があり、スポーツ・自由時間産業が完全に定着し国民の約3人に1人が加盟するまでになった現代のドイツは世界有数のスポーツ王国と成長した。

このような背景でドイツのクラブは、いたるところに身近に存在し、スポーツクラブが町全体の組織の中に組み込まれている。そして現代社会で孤立していく人が増えている中、その人々に社会的な活動をしてもらうような機会を提供している。スポーツ活動をすることにより潜在的な力（ポテンシャル）を発揮する大きな役割を果たしている。また、日本もドイツも人口の波による人口変化に対応して、スポーツの意味が社会に大きく影響することと、クラブは現代社会が抱えている

問題を解決するために大きな潜在的な力をもって
いる事を打ち出している。地域の問題を分析しそ
れに対してコンセプトを考えて進行し、それに対
応できるマネジメントを追及し活動していくと
いう理想的な流れがある。

日本以外に現在は総合型地域スポーツクラブの
進行を、中国・台湾・韓国でも同じような動きが
進められていることにびっくりした。しかしアジ
アの国ではヨーロッパで発展しているような、市
民が自らボランティア行うことが不十分な状況で
あると聞いた時は少し残念に感じた。横のつなが
りが薄れていることや近代化していく社会の問題
・課題部分が重なり合う。これを見ると、わた
し達の役目は、経済や政治などの流れをつか
んで地域ネットワークづくりが必要なのかと感じ
た。クラブ活動をとおして学校・行政・医療など
の諸機関と協力しながらネットワークづくりを行
い、地域の問題を解決していくことが地域で受益
者負担を可能としていく率が上がるような思いを
する。ネットワークづくりは簡単ではなく、町・
行政などと対応し非常にプロフェッショナルなマ
ネジメントの能力をもった人材が必要となる。
その取り組みは素晴らしく感じたと同時に日本の
課題が見えたに思う。

また、ドイツでも日本同様に高齢者の自立した
健康づくりや、近代化された環境の中で現代の子
供たちに影響している心理運動・調整能力低下と
肥満児が増えており、今の自分の町や日本と同じ
問題を抱えていることに驚かされた。しかし、こ
れらの問題はクラブが余り費用をかけずに(幼児・
学校・医療・福祉・家庭など) 諸機関のネットワ
ークにより対応ができていくようだ。この事はこの
研修で聞いて参考になった。この様な社会の変化
により出てくる問題をクラブがしっかり受け止め
て変わっていくことと、健康づくりというニーズ
にあわせてスポーツ(運動)とサービスとを提供
すること、ニーズにあった指導者養成と指導者獲
得することに思う。

クラブは常にニーズにあった施策を行い、ヨー
ロッパ諸国では各機関の連携により、それぞれの
役割と存在は現代社会に必要不可欠な存在である

という事は羨ましく感じる。

ドイツと日本との比較

日本では中央集権で独断資金により物事が決定
されることに対して、ドイツではダイレクトに行
政から補助金・助成金があり、クラブなりのポリ
シーを持ち行政からの援助・支援が必要であると
訴えている。国からいろんなサポートを受けるこ
とができれば機能していく市町村からも助成金
がおりているということで、国とスポーツ団体が非
常にうまく協力をしあいながら問題に対応してい
き住民と市民と国家が協力し合える制度というす
ばらしい伝統が受け続けられている。行政は、ス
ポーツがもっているポテンシャルをどの様に生
かし強化していくか、これを生かし社会を考えて
いくことが重要であるという姿勢。個人的に「かっ
こいい!」と感じた。実際クラブ訪問や講義を受
けて感じる事ができた。

ドイツの教育システムは国の管轄ではなく州の
管轄で行われており各州によって少し違いがあり
全体の教育プランはあるが教師たちが自分の独創
性を持ちながら授業をつくっている。

ここ数年では学校システムに変化があるみたい
だ。(個人的にこの様な環境で教育を受けてみた
かったなあ思った。)また、学校で運動能力に問
題がある子供たちを一定の水準まであげるコース
がありそれには助成金がでる。学校でスポーツ活
動を行うと州のスポーツ連盟から助成金がでる。
指導者に対しても謝金が保証されていて助成金か
ら支払われている。個人の才能を見いだせる環境
が学校現場でできているのだ。これらの活動をス
ムーズに行われている理由は、年に2回 学校・
クラブ・行政の関係者が集まりミーティングを行
い両機関の情報提供の場があるからだろう。ドイ
ツの学校システムの変化で学校とクラブが協力し
ながら進められている中、クラブの伝統があつて
こそその双方の協力・連携ができるということはさ
すがだなと思う。この協力のもとで子供たちにス
ポーツの機会を多く提供できている事と才能発掘
できているのであろう。日本では義務教育の中、

学校クラブ活動・スポーツ少年団などあるが単種目参加にとどまる。多種目を経験させるにはやはり各機関の連携や協力が必要であるし個人の潜在能力を見つけにくい環境は少しジレンマに感じた。

日本のクラブで活用できる事

ドイツの様々なケースのクラブを見て、行政機関・教育機関のしくみの違いや取り組み方は参考になった。個人の理想はあってもクラブとして長く存続させるためには、地域の意見や問題などに対応できるようにならない。ということは、社会がどの様に変動しているか、スポーツがどの様に変動しているか、その中で健康に対する思考、健康の意味を考えることの重要性を感じた。健康づくりや個人のライフスタイルに影響をあたえられそうなサービスをどの様に提供していくか考えないといけない。クラブマネージャーがクラブの存続をしっかりとしたものにしていく事と、クラブ内の関係者が専門知識をもったもの、また資格を所有している人材育成を行いまた確保し協力していく事。クラブ内でそのような体制をつくっていくことの必要性を伝える事。全体的にいろんな角度で分析し考えていく。いろんな目的を持ち、それを達成していき皆でわかちあう、楽しんでいく。このような考え方を教わった。今後の現場で活用していけたらと思う。

わたし達のクラブは小規模で過疎地・少子高齢化である。地域スポーツの推進をすることによって総合型地域スポーツクラブ活動で参加者に運動・スポーツ実施を提供し、健康づくりのために必要な身体活動量が確保できるよう提供し、医療費の節減傾向が伺えるよう医療経済的効果等の評価を行政と協力しながら行えたら良いと思う。可能な方向にしていくにはネットワークづくりと会員の私益性ととともに地域社会に対する公益性を広く周知していく事が必要と感じた。参加者がクラブライフを楽しんでもらえるように。

最後に

この海外研修に参加できたことに感謝することと大先輩方の団員の方々と共に過ごせた一週間は宝物となりました。視野を広げる事ができスポーツクラブづくりに少しでも貢献できたと思います。あと、成田空港へ出発の際に日本体育協会の方々に元気いっぱい見送りをしていただいたお陰で無事帰れたのだと思います。そして事務局の宮本さんには最後の最後までお世話になりました。皆さんとの出逢いには感謝いたします。ありがとうございました。

団員：能田 雅雄

総合型潮見地域スポーツクラブ クラブマネジャー
愛媛県総合型スポーツクラブ連絡協議会 会長

はじめに

ドイツを身近に感じたのは、2006年7月に日独スポーツ少年団交流事業で、我が家に訪問団員2名を迎えたときからである。当時は、クラブ発足3年目であり、唯々ゲルマン民族の大きさと食生活の違いに驚かされ、まさか4年後に自分が彼の地を訪問することは夢だにできなかった。訪問団員からドイツ事情をもっと得ていればと悔んでも後のまつりである。

その直後、愛媛大学の堺教授を中心にドイツのスポーツ事情研修が生まれ、その報告を聞き、総合型スポーツクラブの先進国であるドイツのスポーツクラブの実際を学びたい意向に駆られ、今回応募した。

私たち日本のスポーツクラブの現場では

自分たちのクラブ運営では、毎日が新しいこと尽くめであり、困難の山積みである。順調そうに見えたとしても、それは困難を一つひとつ乗り越えた結果でしかないようにも思える。財源・行政や地域との繋がり、内部のコミュニケーションと課題は数え切れない。

特に、地域コミュニティや行政の施策との関係で、どのようにクラブの活動を関連付けるか、あるいはクラブの存在や活動をどのように展望づけるか、このようなことを考えつつ、成田空港を出発した。

ドイツのクラブは

《実際は》

ドイツの学校教育制度は、日本とはまったく異なっており、学校事業は殆ど午前中だけで、しかもスポーツ・体育活動は学校では行われず、青少年のスポーツ活動は地域スポーツクラブし



かないようである。また、地域コミュニティにしても、公民館や町内会ではなく、地域スポーツクラブを核とした中高齢者の交流が実践されている。会員は、家族であるいは自分の自由時間を利用して地域のスポーツクラブに出かけ、スポーツを楽しみ、クラブハウスでビールを酌み交わし交流を深める。このように、会員にとっては、日常的な楽しみの場であり、クラブ活動（参加）が生活の一部となっているようである。

《行政の支援は》

ドイツで総合型スポーツクラブが大きく発展している基盤は、国の政策としては『ゴールドンプラン』に始まると思われるが、実際には大規模クラブだけではなく、7割以上が会員300名以下である。どのクラブも時代と地域の要請に応じ、循環機器系のケア・肥満防止など新しい事業を展開し、行政の助成も健康増進・移民問題・青少年の教育など、必要なところへ応分の支援をしている。行政の支援の根拠は、福島大学の黒須充教授によれば、『ドイツに於けるスポーツクラブは、参加しない第三者、あるいは社会全体に対して公共の福祉を促進する、社会公益性を有している。』とのことである。そこにこそ支援の理由付けが見出されるのではないだろうか。

《歴史と伝統》

訪問先のサッカーを中心としたTUSグレーベンプロイヒは、今年創立100年を迎え1800名の会員を擁している。これは一朝一夕になったものではない。ここまで来るのには先人の大変な労苦があったようである。地域で人・物・金を有効にマネジメントし、あるいは思い切って合併するなど運営者の血のにじむ努力のなかで培われたものであろう。

《会員・運営者が楽しむ》

クラブ訪問のなかで、参加者やスタッフが心から楽しんでいることが実感できた。これは最初、民族性の違いかなと考えていたが、決してそうではない様である。気候的にも日本より厳しく、また質素・儉約の気風を持つゲルマン民族が、国の施策と論理的必要性によってのみこの事業を展開しているのではない。クラブがスポーツを通じて、『人と人を結びつけ・繋ぐ』という社会的な機能を発揮しているのである。

今後実践しなければならないこと

私たちがドイツに出発する直前に、文部科学省から『スポーツ立国戦略』が出された。今後10年の『新たなスポーツ文化の確立』を目指し、重点戦略、政策目標などが示され、総合型スポーツクラブを中心とした環境整備が戦略の一つになっている。これに歩調を併せ、県もスポーツ振興計画の見直しを行っている。この戦略に、『具体的な裏づけがない。』『予算の裏づけがない。』との批判が出されているのは周知の通りである。しかし私たちは、これを行政任せにすることなく、総合型スポーツクラブに携わる者として、地域のなかでこの問題を世代を越えて『熟慮』と『討議』による堅苦しくない『熟議』を展開し、自分たちの地域で何が必要で、何ができるのか一緒に考えなければならない。

内閣府は、日本の将来ビジョンづくりとして、「支えあいと活気がある社会」を目指し、昨年『新しい公共』を宣言した。私たちは、一人ひとりが尊重され互いに協働し、ひびき合いと支えあえる社会づくりのために一翼を担う覚悟が必要と思われる。

団員：櫻木 英一

NPO法人ウェブスポーツクラブ21西国分 クラブマネジャー

～憧れのドイツ～

私にとってのドイツは総合型に携わる前から憧れの国の一つであった。

特に物作りに関しては日本とは違った形ではあるが伝統を重んじ、より合理的な機能と卓越したデザインがそれを物語っており、特に日本人にも馴染み深い食器、カメラ、車、刃物…など、日本人の生活の中になんか高級なものとしての位置づけされている。そしてその多くを実際に手にし、長年愛用もしてきたのである。特に20年以上使用している車やカメラ・刃物などは大袈裟かもしれないがドイツ人の国民性をとても強く感じていたのである。

更にドイツと言えば同じ敗戦国であり、被害の内容は違っていても同じくとても悲惨な思いをしたことには変わりなく、そこから復興してきたことが頭を過る。

また、国際河川や音楽、美術などの芸術の充実…

スポーツに関しては旧東ドイツの活躍のことやスポーツが文化として位置づいていること、多くの国民がクラブに所属していること、クラブには所属しなくともサポートをしていく気持ちがみんなにあることなどの情報があつたのであつた。これら多くのドイツの情報は社会科の地理が専門の私にとって、やはり一度は見てみたい国の一つだったのである。

～視察に向けて～

今回のドイツ研修は以前からスポーツ先進国、特に地域スポーツの充実ぶりを見てみたいとの強い希望が叶つたもので、一人ワクワクしていた。そのワクワクの理由には15年ぶりの海外渡航と素敵なドイツの街や多くの施設を見ることができることへの期待でもあつた。現在もであるが多くのスポーツ施設への関わりがあり、改修や改築、時



には新設のものまで内容について行政と意見交換をすることがあるのである。ですから、ドイツの施設がどのように考えて作られているかとても興味深いものだったのである。今回の視察ではその辺りを特にしっかり見てこようと臨んだのであつた。

～施設の充実～

スポーツ施設はかなり充実していた…と私の目には映つた。

北欧の冬は日本の北国と同じように屋内でのスポーツしかできないこともあるのであろうが、上手く使い分けが出来るように配慮してあると感心した。

クラブ視察のレポートもあるがここでは私の視点からの報告をしたい。

○「オルケン体操クラブ」

ドイツスポーツの起源でもある体操が中心の「オルケン体操クラブ」古い体育館も大切に利用されており、体操がのびのびと練習できる環境となっていた。特につり輪や鉄棒などの種目がいつでも直ぐにできるようになっていること。床種目用の床もセーフティーマットも跳び箱も練習用具もかなりの充実ぶりでおそらくここで競技会を行うことが出来るのだと思われる。そして最近の日

本の体育館では見なくなった登り綱も普通にあり、真四角の畳を並べればいつでも柔道の練習ができ、日本的な武道場の感覚はないが柔道をするには十分であるようだ。もしかするとこの自由さが海外の柔道の強さかもしれないと感じた。2階にはトレーニングルームもありコンパクトにまとまっていた。トレーナーの方もおられ常時利用者のためのサポートしておられた。

屋内だけでなく屋外には人工芝のサッカー場。もちろんナイター照明付である。ただ日本のナイター照明のようにたくさんの水銀灯ではなく全部で6本の灯りなのであるがサッカーをするには十分の明るさであった。

サッカー場の周りにはビーチサッカー用のスペース、屋外でのバレーボール、若しくはビーチバレーのコートも設けてあった。

スポーツ以外にもバーベキューや皆が集えるホールもあり、飲んだり、食べたりできるスペースがかなり広く確保してあった。これらを地域のみなさんや長年関わってこられた方々のボランティアで運営されているところが凄いと感じた。

○「TSVバイヤードルマーゲン」

一方大手製薬会社の民間企業が支援をする「TSVバイヤードルマーゲン」の施設の充実ぶりにはさらなる驚きであった。何よりも凄かったのは屋外温水プール。外の気温が14℃でも26℃～29℃の水温を保っていてかなり広いスペースを持っているのである。午前中の9時には多くの高齢者が集まり、思い思いの水着姿で楽しそうにウォーキングやスイミングを楽しんであった。また端の方の2コースではドイツのトップスイマーが練習をしており、一般の方と同じ場所で、いるという環境が素晴らしいと感じた。かなりの費用がかかっているにもかかわらずそれを継続させているところが更に凄いと感じた。

「TSVバイヤードルマーゲン」には3つのサッカー場とハンドボール専用の体育館と多種目の利用が可能な体育館を併設しており、ハンドボールのトップリーグのチームも抱えているのであった。そのためハンドボールの会場は2000人の観客が入れる観客席も設けられていた。多種目の利用

が可能な体育館は走り幅跳びや棒高跳びも更には100mのコースも併用されており、大きなホールはオルケン体操クラブと同じように分厚い布で仕切られるようになっていた。もちろん電動で動くのである。その他、音響設備が充実したダンススタジオ、フェンシングを一度に11組ほどできる体育館はフェンシングに必要な電源供給や電光掲示板が備わっていた。日本では見たことのない施設であった。

○「TUSグレーベンブロイヒ」

トラック付きのサッカー場はもちろん天然芝、冬は使えなくなるがこれらと練習グラウンド2面、体育館、グラウンド全体を見渡せるバルコニー付のクラブハウスを市より借りて運営している。日本で言うところの指定管理者なのだろうが、そんな感じはなく自分たちのクラブの施設として根付かせているようにみえた。そして何より理事長さんはじめ多くのスタッフも指導者も会員も自分たちのクラブであることへの誇りを持っていると強く感じた。ここに日本との大きな違いを感じる。

行政側もちろん「貸している」的な発想は全く感じられない。市民のためなら…と。

～共通するもの～

どこのクラブにも共通するものはクラブハウスがあり、そこで多くの人が集えること。もちろんドイツ自慢のビールもソーセージも受益者負担ではあるが自由に利用できるのである。そしてそこが一番のクラブの顔であること。また多くのエンブレム・旗やトロフィーは長い歴史を尊重し自分たちのクラブを強く主張している。

シニア世代の「コルシェンブロイヒ」は大きな体育館は借りているそうだが、クラブハウスはみんなでお金を出し合って銀行だったビルを買ったという。ドイツだからと言って建物の価格が安いわけではなく日本と同じように数千万円するのである。それを買い取り、恐らく上階のマンションは賃貸として貸出、収入源としているのであろう。残念ながらこのような発想が日本にないのである。しかし、ドイツにはそういう風潮が何

処へ行っても感じられる。おそらく州や市などの地域が違っていても同じ考えを国中のみんなが持っていて、支援してくれているのだと思う。

～スポーツ文化～

日本ではまだまだスポーツが文化として確立されていなくてと言われて久しい。なぜなのかという疑問はひとまず置いておき、ドイツのスポーツは文化として成り立っていることに少し触れてみたい。

100年の歴史を持ち自分たちで立ち上げたスポーツクラブ。誰かの真似ではなく自分たち独自のものとして。歴史的にみるとオリンピックが始まったところに近い。そして何より姿勢と規律的な観点から器械体操を選んだこと。いかにもドイツ人らしい。そこから多くのクラブが発足し、自分たちが楽しむための小さなクラブから今回視察したような大きなクラブまで、それらを行政がきちんと支援していることが文化へと発展していったのであろう。

考えるに、音楽や絵画・彫刻などの芸術と言われるものもスポーツもどちらもアマチュアもあればプロもある。同じように国民が慣れ親しみ、必要としているものに行政が分け隔てなく支援する。だから発展もしていくのだと思う。もちろんそこにはドイツ人の合理化主義と民主主義の精神が上手く融合しているように感じ取れる。私的にはここにも日本人が忘れてしまっているものがあるように感じてならない。

日本での総合型地域スポーツクラブが始まって10年近くなる。スポーツだけで言えばかなりの歴史を持ってはいるが国民全体への浸透となかなかの様であることは関係者にしか分からない状況である。日本では体育や部活と言った学校体育がかなり盛んに行われているが、それが楽しみに繋がるかと言うと少々疑問がないではない。

確かに全員がスポーツに関心を持つことは難しいとしてもTVや会場へ出向いての観戦はかなり増えているように感じられる。ゴルフやフィギア

スケートなど…TVでのスポーツ番組はかなりあると思われる。そのメディアを使って総合型を放送していただき多くの国民に知らせていただきたいとも思っている。それくらいしないとスポーツが本当の文化としての位置づけをなさないような気がする。

～終わりに～

これからの総合型地域スポーツクラブは本当の自立を目指さなければならない。しかし、そこには行政の力も必要である。スポーツ分野の行政だけでなく多方面にわたっての協力である。

例えばスポーツクラブが収益を上げることが何となくタブー視されている感じがあるが自分たちのクラブを運営していくためには必要不可欠なことであると誰しもが考え皆が賛同するドイツ。日本的に言うところの現在流行りの介護施設をもったスポーツクラブがあってもいいのではないだろうか…とさえ思う。

日本の国民に聞きたい。自分たちの力で運営していくための資金を自分たちのアイデアで行って何がいけないのだろうか…と。海外ではそうやっているのではないかと。スポーツと健康はもはや別モノではないし、もちろん障害者と健常者の区別もおかしい。サポートすべきはどこなのか今後 国の行政とも話を進めていきたいしもちろん地域の行政や企業との連携も取っていきたく強く感じた。

短い時間でしたがドイツ研修で感じたことは、日本でもこんなクラブハウスが出来たらいいなあ。こんなクラブを作ってきたいなあといろいろな構想が頭を過っていったことがとても収穫だったと思います。

また、同行されました研修仲間も大きな財産の一つになったと思っております。最後に関係者のみなさん、研修生のみなさん本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

そしてまたいつかドイツで乾杯しましょうね。

団員：中村 亮太

総合型うれしのほほんスポーツクラブ 事務局
アシスタントクラブマネジャー

私は、今回の研修で「ドイツと日本のスポーツクラブの違い」を知りたかった。

なぜ日本人はドイツに学びに行くのか。ドイツには何があるのか。日本のクラブは何を目指すのか…。日本人がドイツに引き寄せられる魅力について、知りたかった。

—日本の空の玄関口、成田空港から飛行機で12時間。ついにドイツに降り立った。ドイツって…寒い。しかも雨…。いやいや、そんなことよりしっかり学ばねば。7日間、目一杯やりきろう。

翌朝、ドイツの街並みは、やはり期待通りの街並みだった。レンガ造りの建物に、石畳の道。街を彩る赤や黄色の落葉樹と、シンボルであろう大きな教会。実際に目の当たりにすると、ものすごく落ち着きと風格が感じられる。ドイツに来て良かった。全てが新鮮だ。

でもなぜドイツの景観は整えられているのだろう。厳しい景観法でもあるのだろうか。それとも昔からの感覚的なものなのだろうか…。日本の、八百屋や花屋が立ち並ぶ商店街の風景もいいけど、こちらも大そうきれいです—。

ライン・ノイス郡シュミットスポーツ局長、ケルンスポーツ大学リットナー教授、そして今回の研修のコーディネーターであるベッカー氏等の歓迎を受け、研修がスタートした。

研修内容は多岐に及んだ。ドイツ社会におけるスポーツの役割から自治体のスポーツ振興まで、小学校におけるクラブの役割から各クラブの現状まで、様々な視点でスポーツクラブを見ることができた。

まずは、スポーツと行政と社会の関係について感じたことを。

ドイツでは、国全体がスポーツを支援し、大切に思っているように感じた。ゴールドンプランを元にスポーツの競技者、指導者、そして施設を充実させ、タレントの発掘・育成に対しても制度を整え、意欲的に取り組んでいる。市町村においても、スポーツを通じた青少年育成を、行政としての重要サポートと位置づけている。また銀行グ



ループや保険会社などの一般企業も、クラブや教室に対してサポートを行い、スポーツ社会の中で重要な役割を担っている。

これは、とても素晴らしいことだと感じた。うらやましいと言った方が本音かもしれない。スポーツに携わる人間としては（選手としても、指導者あるいは経営者としても）国全体からの支援があると思えることはとても幸せなことだ。

しかし、このことは私たちが直面している課題の1つだとも感じた。まだ設立したばかりの私たちのクラブは、財政的にも人的にも基盤が弱い。周りには“総合型地域スポーツクラブ”という言葉さえ知らない人も多い。今までのスポーツ体系に比べ、総合型というスポーツ体系がまだ社会に浸透していないのだ。私たちクラブ自身が努力して社会へ呼びかけ、社会を動かせるようになることも、100年先を見据えると、いま行動を起こさなければならないことだと感じた。

それでは、社会を動かすためにはどうすればいいのだろう。その1つの方法として、やはり行政と連携することがあると思う。私の住む町では“地域コミュニティ”という組織が小学校区ごとに発足され、地域の課題解決や活性化、そして地域自治への取り組みが始まった。これは“地域”を活動主体とする総合型地域スポーツクラブの考えと共通するものがあると思う。このような面で行政と協力していくことは、社会を動かす1つのきっかけになるだろう。クラブ側も行政側も、共

通理解の元に時を重ねていかなければ、100年先のクラブ存続はあり得ないし、ドイツのような、社会の中で生きるクラブにはなり得ない。行政に頼ることは、一見総合型の理念とは矛盾するようだが、欠かすことのできない話である。

次に、クラブについて書こう。

ドイツのクラブは、やはり歴史の重みがすごい。—これがドイツのクラブか—と、感嘆させられた。それは今まで、クラブが、単にトレーニングを行って家に帰るだけという、“消費型”の場所だったのではなく、クラブに集い、共にトレーニングをし、そして語らうという“滞在型”の場所だったからゆえにだと思ふ。町の誰もが集い、愛してきたからこそ、その歴史が生まれ積み重なってきたのだと思った。クラブを大切に思い、歴史をつないできた人たちの魂がクラブハウスこもっているように感じた。そしてその思いをまた後世につないでいく。スポーツクラブにおける“循環型社会”がドイツには出来上がっているように感じた。

そしてその社会を作り上げているのが、町の人々の“ボランティア精神”だ。クラブのために恩返ししよう、子供たちのために恩返ししよう。そういった気持ちが町中に溢れているからその歴史が積み重ねられているように感じた。

これも私たちが最も見習うべきものであり、100年先に向けて、今その裾野を広げていかなければならないことだと感じた。まだ設立したばかりだからこそ、100年先に向けた舵取りがしやすい。自分たちのクラブに対して信念と自信を持ち、理想を追いかけ、しかしクラブを存続させなければならぬという危機感は忘れず。そして今のスタッフを中心に、ボランティア精神を持つ人を増やしていくことで、日本のクラブもドイツのクラブに劣らないものが出来上がっていくと感じた。

最後に、私の今回の研修テーマであった「ドイツと日本のスポーツクラブの違い」について。

ドイツと日本のスポーツクラブの違いについて、私が1番に感じたこと。それは“日本もドイツも抱えている問題は何も変わらない。ただ唯一の違いは、100年の歴史と、それを支えてきたボランティア精神が町中にあふれていること”ということだった。つまり、そう大きな違いはない、と感じたのだ。

ドイツでの今の社会問題は、少子化問題や高齢化問題、財政問題や子どもの体力低下問題など、日本で話題になっていることと何ら変わらなかった。不思議なことに、時の流れには世界共通のものがあるような気がした。

私たちの町でも同じような問題を抱えており、悩み事はつきない。しかし私たちのクラブでは、子供たちを対象にしたスポーツ教室と、中高年を対象にした健康体操教室をメインに活動している。これは非常に的を射た教室だと、ドイツに行つて改めて感じた。自信を持った。

これらの教室は、子どもの調整力向上にはつながるし、中高年の社会参加や医療費抑制にはつながる。そして何より、会員獲得につながる。ドイツでもまさにこのような教室が行われており、これらの教室を充実させ、市民のニーズに応える他の教室を増やしていくという私たちの考えは、何も間違っていないと感じた。

また最近ドイツでは、小学校が全日制となり、放課後にクラブに通う子供たちが減ってきているという。それがクラブの新たな課題になっているようだ。では日本はどうだろう。元々日本の学校は夕方まであり、その後“部活動”を行っている。日本のクラブはその“部活動に通わない子”を対象に教室を展開しているところが多い。となると、ドイツが今から直面する課題に、むしろ日本は先に対処しているのではないだろうか。私たちのクラブに、ドイツのクラブが学びに来る日が訪れるのではないだろうか。今回の研修は、そんな夢さえ見させてくれる、とても中身が濃く素晴らしいものであった。

日本人がドイツに引き寄せられる魅力。それは今の日本人が求めている「心のゆとり」であったり「地域のつながり」であったり、そういうものがドイツにあるからなのかもしれない。そしてスポーツを愛し、子供たちを愛する心。今回の研修で私たちが感じたことを地域や子供たちに還元し、日本に合ったクラブを作っていくことで、総合型地域スポーツクラブが日本を変えるかもしれないと感じた。

—今回の経験は、私の人生の中でも大きな宝となるだろう。研修に参加させてくれた人たちに心から感謝したいと思う。本当にありがとう—。

団員：宮崎 武洋

長崎市西部総合スポーツクラブ 会長

クラブを創設して5年。このままでよいのかという思いがずっとあった。もっと会員を増やすべく努力をするべきか？プログラムを増やすべきか？いやいや地域にもっと根ざすまでこのままのほうが良いのではないかと自問自答したり、スタッフと何度も話し合ったがなかなか意見はまとまらなかった。そんな時、2010年クラブマネジメント指導者海外研修があるが行かないか？と言う話を市の担当者からいただいた。大体今までも後先考えず何にでも飛びつく性格である。今度もすぐダボハゼのごとく飛びついた。そして後になってハテいったいドイツに何しに行くのか？何を勉強したいのだろうか？自分たちのクラブに何かメリットになるものがあるのだろうか？と考える始末。丁度その頃近所の市議員の方が「宮崎君、子どもの面倒ばかり見らんで今からは高齢者も見てくださいな」と言う話をいただいた。どんな事ができるか検討しだしたところで、場所、お金、人は？と言う事が頭にあったので、スポーツクラブの本場ドイツでこれをテーマに行政や企業との結びつきなどを勉強をしてみたいと参加を決意した。事前研修や丸山団長さんを始めとする14名の方たちと接し話すうち、なんと自分が井の中の蛙だった事か、恥ずかしくなるばかり、自分がドイツに行って大丈夫だろうか？と不安が膨らむばかりだった。でも元来が「どげんかなるちゃー」の性格の持ち主、「こりゃ先輩諸氏の経験豊富な話を一杯聞けてラッキーと思うようにした。

そして、成田からいざドイツへ出発。すると早速私に幸運の女神が微笑んだ。エコノミークラスに乗ったのに飛び上がる直前シートの不具合が発覚！チーフパーサーが来て直らず、機長がきてファーストクラスへ移動させてくれた。誰もが「飛び上がってしまえば戻ってくるだろう」と思っていたそうだが、ずっとドイツまでファーストクラスで過ごすことができた。座席の広さは30センチ広く、リクライニングで手足は伸ばして寝れるし、



ワインは何種類も出てきて飲み放題、食事もこれでもか、これでもかと際限なく出てきて、最後はノーサンキューという始末。おまけに、美人のスチュワーデスが2人もついて何やかやと世話を焼いてくれた。今後の生涯でも2度とこんな経験は味合えないのではと思う。ドイツに着くまでに幸運を全部使い切ったのでは無いかと言うほどの快適な旅のスタートだった。

12時間後無事ドイツに着いて、現地での世話や講演をしてくれる、ライン・ノイス郡スポーツ課のアクセル・ベッカー氏・福島大学の黒須先生や通訳をしてくれる井手氏の出迎えを受けホテルへ向かった。そのバスの中で研修中のレクチャーを受けた。「疑問に思った事はどんどん質問してください。日本の方は分かったのか分からなかったのか余り態度で表さないで」という話をされた。ホテルであらためて顔見世も兼ねて軽い食事をとられ、皆元気に飲んだり食べたりしたが、何か1日中食べている感じがした。明日からのドイツの生活に期待しながら眠りに付いた。

さて、ドイツでの講義が始まり、かなりハードな厳しい時間組みであったが、講師の方がユーモアを交えながらやさしく親切に話をしてくださり、何よりも団員の皆さんの経験を基にした適切な質問がどんどん飛び出し、全てが身に付く実りある講義で時間も長く感じる暇が無かった。

クラブ視察には、シニア世代のクラブ・多世代

団員：慶田花 英太

財団法人沖縄県体育協会 クラブ育成アドバイザー

研修に応募した理由

平成21年度に「クラブマネジメント指導者海外研修事業」が始まった時、すぐに『行きたい!』と思ったことが今回の研修に応募した理由である。その背景には、ドイツをモデルにして始まった総合型地域スポーツクラブの将来像や支援体制をイメージできなかったことにある。もちろん、日本とドイツには歴史文化的な差異はあるものの、地域スポーツクラブの先進地であるドイツの実情を実際に目で見て学ぶことで、今後の日本(沖縄)の総合型地域スポーツクラブを含めた生涯スポーツの在り方のヒントを見つけることができるのではと考えた。

研修に参加するまでに

研修に応募したいと思って、まずはクラブマネジメント資格を取得することから始まった。タイミング良く、沖縄では平成21年度にアシスタントマネージャー養成講習会を初めて開催し、資格を取得することができた。

次に、条件を満たし実際に応募したのだが、昨年度より希望者数は増えると予想していたことと、クラブ育成アドバイザーより実際にクラブに携わっている人が優先されるだろうと思っていたので、派遣が決定するまでは正直厳しいだろうなと思っていた。派遣が決定した時は、驚き半分うれしさ半分だった。

研修で学んだこと

10月18日に結団式を終え、19日に成田空港を出発し、いざドイツへ。一緒に研修に参加する団員のみなさんのおかげで不安はほとんど無く、楽しみでワクワクしていた。ドイツに向かう機内でも他の団員と談笑できたおかげであまり疲れること



なくドイツに到着した。ドイツの気温は沖縄より20℃程低くて寒かったが、ドイツの街並みや研修のことで我慢することができた。

まずドイツに着いて感じたことは、日本と違った街並みであった。街の建造物やあちらこちらに見える様々な広告物、さらには植物やファッションなど、どれをとっても日本とは違った雰囲気があった。また、宿泊先のあるグレーベンプロイヒは田舎町で、比較的安全で夜も静かな地域だったためか、ドイツはあまり派手さの無い国という印象を受けた。後から研修団の案内をしてくれたアクセル・ベッカー氏から「ドイツは家に対してこだわりを持つ人が多く、その他は質素な生活をしている」と聞いて、印象通りの国だと感じた。この街並みなどのドイツ文化に触れたことで、講義やクラブ視察の際により具体的にイメージしながら受けることができた。

講義の中で一番印象的で勉強になったのは、フォルカー・リットナー氏の講義で、「ドイツでは自分の利益になることを自発的に行う文化があ

る」ということであった。つまり、スポーツを行ないたい人たちは、自分たちの力で活動していくことが当然だという認識を持っているということである。当たり前のことだと言えばそうであるが、日本ではまだスポーツに対してお金を払ってまで行うことに抵抗を感じている人が多い。日本では、スポーツを奨励するために行政がすべてを準備して行なっていた歴史があり、その習慣がまだ根付いている。そのような現状から、スポーツを自分から行ないたいという意識の変化がないと本当の意味でスポーツを自発的に行うことは難しいと感じた。

また、ドイツではスポーツを自発的に行うことで得られる健康づくりや社会性などの効果を行政も高く評価し、そのようなスポーツクラブに対して積極的に援助を行っている。そのことは、行政がスポーツの意義を理解し奨励しているからだと思うが、その背景にはスポーツを自発的にしている人々の存在があるからだと感じた。そのような自発的な活動を行う人々がいるからこそ、行政としても積極的に支援をしていけるのだと思う。日本でも地域住民が自発的にスポーツ活動を行い、行政の支援を得られるような実績や行政に対して協力を得られるようなPRをしていくといった発想転換が必要である。この点については、見習うべき点だと感じた。

さらに、日本とドイツのスポーツ振興には制度的な大きな違いを感じたが、高度化や都市化に伴う様々な課題には共通点を感じた。その課題の中には、スポーツに影響を与えるものもあるが、逆にスポーツがその課題に対して果たす役割も存在し、今後その役割が重要な位置を占める可能性を感じた。社会が大きく変化していく中で、スポーツの意義やその果たす役割をスポーツに携わる人々が自ら自覚し発信していくことがこれから重

要なことだと学ぶことができた。今後の生涯スポーツの中で総合型地域スポーツクラブは、地域住民が自発的にスポーツを行なうといった意識の改革として大きな役割を果たすのではないかと思う。これからも各地域でいろんなクラブができて、その地域で活躍することを期待したいと思うし、私自身もこれからも携わっていきたく強く感じた。

最後に

今回のドイツ研修に参加して、今後の日本の生涯スポーツ社会のヒントを人々のスポーツに対する意識の中に感じたが、それ以外にもスポーツを行うことそれ自体の楽しさが世界共通だと感じ取れたことも大きな収穫だった。TVやマスコミを通してプロスポーツやオリンピック等の世界規模のスポーツイベントを見ることはあっても、それ以外のアマチュアスポーツの実態を知る機会は少なく、今回の研修で地域においてスポーツを純粋に愛する多くの人たちが自分たちのレベルでスポーツを行っていることを見ることができた。この経験はどんな文献より参考になるものだと思う。機会があれば、何年後かにまたドイツに行ってみたいし、さらに他の国も見たいという気持ちにもなった。そして、何よりスポーツに関わっていることにさらに誇りを持てるようになった。ドイツ研修に参加してこのような気持ちが湧きあがってきたことは予想していなかったことだが、とても成長できたと思う。

最後に、一緒に研修に参加した団員や応援してくださった方から多くの激励をもらい心強く研修に参加できたこと、さらにこのような機会をくれた日本体育協会やその他多くの関係者に感謝をしたいと思う。ありがとうございました。

派遣事務報告



派遣事務報告

派遣団総務：宮本忠（日本体育協会生涯スポーツ課）

【派遣準備（出発前）】

平成22年

○4月16日（金）

- ・日本スポーツ振興センターより、スポーツ振興くじ助成金の内定通知を受理。

○5月13日（木）

- ・都道府県体育協会に対し、派遣団員の募集通知を送付。

○6月4日（金）

- ・派遣団員の募集を締め切り、結果、16道県体育協会から22名の推薦を受け付ける。

○6月14日（月）

- ・第1回生涯スポーツ推進専門委員会において、実施要項承認。
- ・同委員会において、派遣団団長に丸山順道氏（総合型地域スポーツクラブ全国協議会常任幹事、NPO法人923みんなんクラブ理事長）、副団長に中澤謙氏（うつくしま広域スポーツセンター企画運営委員会委員長、会津大学文化研究センター准教授）を決定。
- ・同委員会において派遣団員12名の内定を承認。残り12名については、内定者としないうこととし、内3名については、欠員が出た場合の補欠者とした。なお、選定基準は、①日本体育協会公認マネジメント資格の有資格者であること、②ブロック別のバランス、③活動状況等とした。

○7月8日（木）

- ・内定者12名、非内定者10名、推薦のあった16道県体育協会に対し、内定通知及び非内定通知を送付。

○7月9日（金）

- ・丸山氏（団長）及び中澤氏（副団長）に委嘱状を送付。

○7月20日（火）

- ・ドイツ受入先であるライン・ノイス郡スポーツ

相談課より、日程変更の依頼メールを受信。日程変更の可否について検討。

○8月9日（月）

- ・団長、副団長、内定者、推薦道県体育協会に対し、日程変更通知文を送付。
- ・団長、副団長、内定者に対し、ドイツ研修事前研修会の開催案内を送付。
- ・事前研修会の講師及びその所属長に対し、講師依頼文を送付。

○8月19日（木）

- ・渡航にかかわる航空券・宿泊・移動の手配業者を見積り合わせにより選定。結果、トップツアー（株）を指定代理店とすることに決定。

○9月3日（金）～4日（土）

- ・岸記念体育会館内（東京）にてドイツ研修事前研修会を実施。千葉県総合スポーツセンターの川瀬周平氏から「ドイツのスポーツ振興、スポーツクラブ」について講義いただき、また、うつくしま広域スポーツセンターの平山康夫（昨年派遣団員）からは昨年度のドイツ研修報告を行っていただいた。渡航先でのプログラムを効率よくとり進めるために有意義な研修となった。さらに、派遣日程、研修内容、役割分担、渡航にかかわる諸準備等についても確認を行った。

○9月28日（火）

- ・事前研修会に参加した内定者12名及び推薦道県体育協会に対し、派遣団員決定通知を送付。

○9月～10月

- ・派遣諸準備（土産品購入、派遣団メンバーリスト作成、関連書籍購入、傷害保険加入、旅行代理店との打合せ等）
- ・ドイツ受入先であるライン・ノイス郡スポーツ相談課と日程の詳細をE-Mailにて調整

【派遣期間（研修時）】

平成22年

○10月18日（月）

〈派遣団最終打合せ／結団式／成田前泊〉

- ・15時に岸記念体育会館（東京）に派遣団員が集合し、日程、役割分担、携行品等の最終確認を行った。
- ・16時50分より同会館において結団式を行い、クラブ育成課長の青田慎太郎の激励あいさつ、丸山団長のあいさつをはじめ、各団員の決意表明等が行われた。結団式終了後、日本体育協会生涯スポーツ部の職員に見送られ、成田空港がある成田市に移動し、成田エクセルホテル東急に前泊した。

○10月19日（火）

〈成田空港発／デュッセルドルフ空港経由／グラーベンプロイヒ着／ホテルゾンダーフェルト泊〉

ホテルのフロントで、スーツケースの重量が、機内持ち込み制限内（20kg以内）であることを確認し、時間的な余裕を持ってホテルを出発。手配バスで成田空港へ移動し、トップツアー(株)の指示にしたがって搭乗手続きを終えた。出国審査手続き等を順調に済ませ、12時20分発LH715便にてドイツに出発。研修地最寄りのデュッセルドルフ空港へは直行便が飛んでいないことから、ミュンヘン空港を経由するフライトとなった。ミュンヘン空港での乗り継ぎ時間はわずか45分。急ぎ足での移動となったが、無事乗り継ぎに成功し、デュッセルドルフ空港には定刻に到着した。空港には、ドイツで受入を担当していただくライン・ノイス郡スポーツ相談課のアクセル・ベッカー氏と通訳の井出鉄矢氏、そして福島大学人間発達文化学類教授の黒須充氏の出迎えを受けた。黒須氏は、我々日本団が訪独したこの時期に、ケルン体育大学特別研究プロジェクトに客員教授として参加していたこともあり、今回の研修プログラムに都度参加していただき、コーディネーター役を買って出た。空港からは手配バスで研修地となるグラーベンプロイヒ市に移動し、期間中の宿泊先と

なるホテルゾンダーフェルトへと向かった。バス車中では、ベッカー氏が歓迎のあいさつを行い、日本団を温かく迎え入れた。ホテル到着後はホテルが準備した軽い夕食を済ませ、明日からの研修に備えて就寝となった。

○10月20日（水）

〈講義①②③／クラブ視察①／ケーゲル体験／ホテルゾンダーフェルト泊〉

いよいよ研修のスタート。この日からお世話になる通訳の多田茂氏と合流し、1日目の研修会場となっているライン・ノイス郡庁舎に徒歩で移動。会場到着後、研修が始まる前に、ライン・ノイス郡スポーツ局長のユルゲン・スタインメッツ氏が会場を訪れ、歓迎のあいさつと記念品の交換、記念撮影を行った。公式の歓迎行事は、思いのほかリラックスした雰囲気で行われ、次の講義①にスムーズに引き継がれた。講義①では、ケルン体育大学スポーツ社会学主任教授のフォルカー・リットナー氏から、ドイツのスポーツとスポーツクラブについての社会的な分析が示された（以下、講義内容は「講義概要報告」を参照）。続く、講義②では、ベッカー氏から「ライン・ノイス郡のスポーツ」と題して、ドイツのスポーツシステムやスポーツ振興についての講義が行われた。1日目の午前中は、これからドイツスポーツ事情を学ぶ上で基礎的な知識を得る大変良い機会となった。講義②終了後、庁舎近くの食堂でランチミーティングをとり、次のプログラムが行われるコンシェンプロイヒ市に手配バスで移動。元ビール工場であったという伝統的で落ち着いた雰囲気のある市スポーツ課事務所の会議室で、講義③「自治体のスポーツ振興」と題し、行政サイドが行うスポーツ支援について講義が行われた。講義終了後、再び手配バスに乗り込み、一つ目のクラブ視察先であるコンシェンプロイヒシニア世代スポーツクラブへ移動。クラブハウスで、手作りのお菓子と美味しいお茶がふるまわれ、クラブの理事となごやかな懇談が行われた。また、クラブが行っているプログラムについても詳しい説明があり、シニア世代ならではの活動と取り組みが紹介された。クラブ訪問後は、近隣の体育館に移動し、シ

ニア世代に人気があるというドイツのボウリング「ケーゲル」を理事の方々と一緒に楽しんだ。夕食をとりながら夜遅くまでケーゲルに興じ、ホテルに戻った時には21時を回っていた。

○10月21日 (木)

〈講義④⑤⑥／クラブ視察②③／クラブとの夕食懇親会／ホテルゾンダーフェルト泊〉

研修2日目の朝は、昨晚のケーゲルで団員の緊張もほどけ、とても和やかな雰囲気の中で研修に臨むことができた。昨日と同じライン・ノイス郡庁舎会議室で行われた講義④⑤⑥では、団員の知的好奇心が爆発し、講義の終了時間を過ぎては質問、また質問が飛び交い、受入担当者であるベッカー氏を困惑させた。後日談ではあるが、これまでに多くの日本人を受け入れてきたベッカー氏にとって、いつも控えめな日本人がこれほどの探究心を見せたのは初めての経験だったという評価をいただいたほどであった。続くクラブ視察②③では、いずれも100年を超える歴史を持つクラブを訪問させていただいた。施設、プログラム、選手育成システム、指導体制等、理想的と思われるクラブの姿を見せたいいただいた一方で、クラブの理事からは、後継者問題、資金問題、子どもたちのクラブ離れ等々、様々な課題を抱えながらクラブ運営しているという実情も聞くことができ、日本と同様の悩みや課題をあることを知ることができた。2日目の研修の締めくくりは、オルケン体操クラブ理事の方々と夕食懇談会が開かれ、楽しいひと時を過ごさせていただいた。日本団を我がクラブに招き入れ、どうぞ何でも観ていってくれ、楽しんでいってくれという寛大さに心を打たれるばかりだった。この日は、すべて徒歩での移動。22時過ぎにホテル着。

○10月22日 (金)

〈クラブ視察④／講義⑦・学校視察・講義⑧／まとめ／答礼夕食会／ホテルゾンダーフェルト泊〉

研修3日目は、手配バスでドルマーゲン市に移動し、TSVバイヤードルマーゲンを視察(クラブ視察④)。クラブ名にバイヤーの名がある通り、

製薬会社のBayer(バイヤー)がスポンサーで支えているクラブで、これまでに視察した小・中規模のわが町のクラブとは異なり、圧倒的な資金力に支えられた大規模なクラブであった。日本の国立大学の構内を思わせる広大な敷地の中に、「屋内プール」「フェンシング場」「屋内陸上競技場・練習場」「ハンドボールコート」等の施設があり、日本にはない規模のクラブを見ることができた。また、視察後は、講義⑦「学校とスポーツクラブについて」と題し、TSVバイヤードルマーゲンと学校との関係について説明を受け、学校と競技スポーツの連携システムが確立していることを学んだ。その後、クラブの中にあるレストランで昼食をとり、次の視察先であるノルベルト・ギムナジウム(学校)に手配バスで移動。この学校は、クラブと連携してタレント発掘事業を実施している特殊な学校で、午前中に視察したTSVバイヤードルマーゲンとも連携し、多くのタレント性を有した子供たちを育成しているとの説明を受けた(講義⑧)。

また、引き続き行われたベッカー氏による最終講義では、3日間の研修プログラムのまとめが行われた。初日のドイツのスポーツ事情の概論的な講義に始まり、小・中・大規模のスポーツクラブの現地視察、そしてドイツ社会の変容とその影響を受けて苦悩するスポーツクラブの生の姿があったことを振り返り、短い研修期間ではあったが、あらためて盛りだくさんの内容であったことを気づかされた。

この日のプログラムをもって、日本団に帯同していただいたベッカー氏とお別れになることから、ホテルに戻った後、日本団主催による答礼夕食会を行うことになった。夕食会には、研修でお世話になったベッカー氏をはじめ、ケルン体育大学のリットナー氏、本研修プログラムをコーディネートしていただいた福島大学教授の黒須氏、通訳の多田氏、井出氏等に出席いただき、研修の感想やお礼を申し上げた。また、最後には、リットナー氏から研修修了証明書が各団員に手渡され、これ以上ない思い出の品となった。22時15分ホテル着。

○10月23日（土）

〈移動／ケルンスポーツ大学／ケルン市内／ハンドボールブンデスリーグ観戦／ホリデイインデュッセルドルフ泊〉

この日は、明日の帰国に備え、宿泊先をデュッセルドルフ空港付近に移すため、スーツケースをバスに詰め込んでからの出発となった。これまでお世話になった通訳の多田氏とはここでお別れとなり、ここから先はもう一人の通訳の井出氏と黒須氏に日本団を引率してもらうこととなった。バスはまず黒須氏と通訳の井出氏が通勤・通学しているケルン体育大学に向い、簡単に施設見学を行い、その後ケルン市中心街に移動し、2時間弱の自由時間を設け、世界遺産のケルン大聖堂を見学したり、ショッピングを楽しんだ。また、黒須氏の案内で、ライン川沿いにあるオリンピックミュージアムも見学することができた。

お昼過ぎに手配バスに戻り、テイクアウトしたランチを食べながら、ドルマーゲン市にあるTSVバイヤードルマーゲンのハンドボール会場へ移動。ハンドボールブンデスリーグの試合を観戦する前に、同時期にドイツ研修に訪れていた日本トップリーグ機構の関係者や現地日本法人関係者、そして在デュッセルドルフ日本国総領事館総領事の小井沼氏とともに、ドルマーゲン市の歓迎レセプションに招待され、我々日本団がドルマーゲン市の日本誘致合戦に一役買う榮譽を与えられた。ハンドボールの試合も、さすがヨーロッパの人気スポーツであるだけに、最高の盛り上がりを見せた。

試合観戦後、手配バスでデュッセルドルフに移動、ホテルにチェックインし、ドイツでの最後の夜を各々楽しんだ。

○10月24日（日）

〈デュッセルドルフ空港発／フランクフルト空港経由〉

帰国のため、ホテルのロビーに集合し、現地旅行代理店スタッフと合流して手配バスで空港へ出発。現地旅行代理店スタッフの案内の元、自動チェックインシステムにより各自で搭乗手続きを行ったが、パスポートが機械に読まれなかったり経由地のフランクフルト国際空港から成田空港までの搭乗手続きができなかった人がいたり戸惑う場面も。また、荷物を預ける際には、重量制限の20kgを超えた団員もいたが、他の団員と合わせて計ってもらうなど、思っていたより柔軟な対応をしてもらった。

10時25分発LH807便でデュッセルドルフ空港を出発し、11時20分に経由地のフランクフルト国際空港に到着した。出国審査では、ユーロ圏内とその他の国や地域の方に分かれ、少し人は多かったがスムーズに手続きが行えた。航空会社の都合により搭乗直前まで座席が決まらず、少々不安を覚えたが、無事13時35分発LH710便でフランクフルト国際空港を出発した。

○10月25日（月）

〈成田空港着／解散〉

7時30分成田国際空港に到着。帰りの飛行機は団員の座席がバラバラだったが、日本からの団体旅行者も多く、思ったより安心して過ごすことができた。5泊7日の研修は、ちょっとしたトラブルもあったが、団員すべて健康で無事に帰国することができた。

手荷物を受け取った後、到着ゲートに着くと昨年参加者が出迎えてくれた。これで研修の全日程を終了し、解散となった。

Photo snap

10月18日



結団式にて



結団式団長あいさつ

10月19日



無事デュッセルドルフ空港到着



深夜の食事



ホテル周辺の町並み

10月20日



シニア世代クラブで出た手作りお菓子



ラインノイス郡庁舎



ラインノイス郡スポーツ局長 スタインメッツ氏



ラインノイス郡庁舎で集合写真

10月20日



リットナー教授による講義



ベッカー氏による講義



みんなで昼食



ヴァルター氏による講義



シニア世代クラブハウス



シニア世代クラブでの交流

10月21日



ギーゼラ氏による講義



シュミット氏による講義

10月21日



TUSグレーベンプロイヒを視察



TUSグレーベンプロイヒの活動風景



オルケン体操クラブのクラブハウス



オルケン体操クラブの活動風景



オルケン体操クラブの方との夕食懇談会

10月22日



TSVバイヤードルマーゲンの温水プール



TSVバイヤードルマーゲンのグラウンド



TSVバイヤードルマーゲンの屋内トレーニング施設

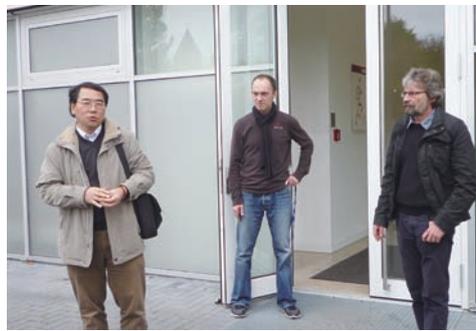


ケーニッヒ氏による講義

10月22日



学校視察 ノルベルトギムナジウム校舎



学校視察 ヘンシェル氏による説明



答礼夕食会の様子

10月23日



ケルンスポーツ大学サッカー場



ケルンスポーツ大学サッカースタジアム



ハンドボール観戦前の歓迎レセプション参加



ハンドボールブンデスリーグを観戦

10月24日



ルフトハンザで帰国

平成22年度財団法人日本体育協会
公認クラブマネジメント指導者海外研修事業
報告書

発行日 平成23年3月31日
発 行 財団法人日本体育協会
〒150-8050
東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
TEL 03-3481-2278
印 刷 ホクエツ印刷株式会社



総合型地域スポーツクラブ

—創立100周年記念事業スローガン—

**日本のスポーツ100周年
誇れる未来に
あらたな一歩**



日本体育協会・日本オリンピック委員会

日本体育協会は平成23(2011)年に創立100周年を迎えます